毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊
定價金五錢



明治三十年四月十日發兌

第九拾九號

マゼラン及古反古新刊發賣

世界叢書第三册

マゼラン

百難を排し萬苦を嘗め目的大半成就し身は異域の蠻手に殪る、マゼランの傳記は一部の「功名難」史也、又大なる喜悲劇也、此書彼れの豪氣大膽世界一周の卒先者として如何に苦心慘憺せしかを記述して餘蘊なし、行文平易流暢、毫も譯文難澁の通弊を見ず、ダーウヰン(世界叢書第一册)を讀み、グールト(同第二册)を讀み、而して此書に至る、自ら雪花月三色の妙味あらん。

挿畫
定價廿錢
郵稅四錢

嵯峨の家主人著

古反古

定價廿錢
郵稅四錢

此書題して古反古といふは、多くは著者の舊稿を輯めしに由る、然れども文は必ずしも古きもの丶みに非ず、篇中論文あり、記事文あり、又叙事文あり、其論は天風颯々、其記事は雲濤漂渺、其叙事は明細緻密、而して別に小兒の世界あり、家庭讀本として趣味に富むこと、猶春花秋月の興多きが如し、苟も大日本の眞男兒たるものは、一本を購ふて徒然の讀本とすべきなり

發行所　東京京橋區日吉町　民友社

民友社出版書目社告

- 新刊 阿新丸　定價六錢　郵税二錢
- 新刊 阿部仲麿　同前
- 新刊 鐵道王グールド　定價廿錢　郵税四錢
- 新刊 ウエリントン　定價十二錢　郵税二錢
- 新刊 子ルソン下卷　定價八錢　郵税二錢
- 新刊 金貨本位はや・わかり　定價十錢　郵税二錢
- 新刊 既成西比利亞鐵道　定價十二錢　郵税二錢
- 新刊 雲井龍雄　定價十二錢　郵税二錢
- 新刊 大石良雄　定價卅五錢　郵税六錢
- 新刊 兵營小訓　定價十五錢　郵税四錢
- 進歩乎退歩乎　定價十錢　郵税二錢

- 人物管見　定價十五錢　郵税四錢
- 靑年と教育　定價十五錢　郵税四錢
- 靜思餘錄　定價十五錢　郵税四錢
- 文學斷片　定價十五錢　郵税四錢
- 天然と人　定價二十錢　郵税六錢
- 第二靜思餘錄　定價十錢　郵税二錢
- 風雲漫錄　定價十五錢　郵税四錢
- 家庭小訓　定價十二錢　郵税二錢
- 經世小策 上下 各　定價二十錢　郵税四錢

（以上十一冊國民叢書既刊完部德富猪一郎著作）

- 武備教育　定價十二錢　郵税二錢
- 遠征　定價十二錢　郵税二錢

四月三日以後の『國民之友』

三日發行より掲げ初めたる口繪は勝伯珍藏の關ケ原大戰爭の古繪卷にして慶長年間の作、蓋し他に見る可らざるの珍品也

當號以後大に露國文學佛國文學の紹介を計る可し露國神學士にして露國文學に精通し露國文豪トルストイ伯と懇意なる小西增太郎君及多年佛國に遊ひ油繪新派の驍將として知られ兼ねて佛國文學に精通せる久米桂一郎君は本社の客員として、特に露佛文學技藝の紹介に力を盡さるゝことを約諾せられたり露國神學士として露國文學に精通せる石龜一郎君(竹村智童)が從來露國文學の紹介を擔當せらるゝは讀者の了知せらるゝ所の如し

大學出身者中最も日本固有の文學に精通し新躰詩家として有名なる文學士大町桂月君は客員として『史論』その他に力を盡さる

數個國の外國語に通し、希臘伊太利の文學に精通せる上田敏君は亦我社の爲めに力を盡さるべく第一着として伊太利の大詩人ダンテを紹介せらるゝ筈なり

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

民友社編纂（再版）

金貨本位はやわかり

定價拾錢
郵税貳錢

貨幣法は愈々頃日の官報を以て公布せられたり、而して其實施は僅々六ヶ月の後にあり、左れば吾人は此の短日月間に是非共之を了知せざるべからず、此書之を説明して平易明晰

世界經濟上の變動

價十二錢
郵税二錢

本書を初て出版せしは去る明治二十六年四月に在り彼の印度幣制改革の擧ありて銀價大暴落を來たせるより二ヶ月前なりとす、世人は歐米諸國が金貨本位を採りし爲めに商業社會に不景氣を來たせりと想へり本書は生産分配機關の改良—即ち天然力の應用と運輸交通の大進歩が生産超過を來たし隨て歐米諸國の物價を低落したるを論證せり世人は金貨の欠乏よりして金價騰貴したるものにして銀價は餘り低落せず隨つて金貨國の困難を來たせりと思へり本書は金貨の需要敢て增加せしにあらずして銀の供給に非常に多きを致し隨て銀價の低落を來たしたること他の物價下落の理由と一般にして歐米の困難は干涉保護政策より來ることを論ぜり近頃本書を讀める人、本書を評して云はく本書の出版は五年前に在りと雖も宛も豫め今日の經濟問題を論せる感なくんばあらずと、然り本書は獨り今日金貨本位の結果に關する問題に參考多きのみならず今日の經濟問題全躰の參考として裨補なくんばあらず是を以て此際特に經濟上に注目せらるゝ讀者に本書を推薦す

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

速記法 自宅獨習生募集 月謝二十錢 二ヶ月卒業

規則入用者は郵劵二錢を投ずべし

東京下谷區徒士町二丁目三十番地 速記學專修所

民友社近刊豫告

抒情詩

携帶便用美製本
理想畫寫眞版六個入

德川家光

彼は如何に發達せしや併せて正雪を傳す

木戸孝允

維新は如何にして成りしや松菊人物詳傳

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵税
一冊	金五錢	金五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	地方郵税共 金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人 吉崎圓吉
編輯人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

本社電話番號本局七十番

發行兼編輯人 吉崎圓吉
印刷人 金子佐平
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治三十年四月十日發行

家庭雜誌第九拾九號

目錄



家庭雜誌第九拾九號

（明治三十年四月十日發兌）

社説

幼稚園

幼稚園は學校にあらず、幼兒に學問せしむべき處にあらず。無教育無智識にして性情鄙悪なる子守などに愛兒を托することの不安心なるが爲めに幼稚園に托するなり。幼兒をして家にのみ在らしむれば、或は運動の不足を生じ、或は不規則に菓子其他の食物を強請て、胃腸を傷ひ、身躰の發育に大害を及ぼすの虞あるが故に幼稚園に托するなり。若し我家に廣き庭園ありて、多くの兒童を集め得べく、運動を十分ならしむべく、不規則に食物を與ふることなきの方法行はるれば、幼稚園に托するの必要なしと謂ふも可なり。

斯の如き道理は、大抵の人には分り居ることにして、吾人の贅辯を要せざることなれど。世間尚ほ幾多の舊教育若しくは無教育の父母あり、幼稚園を以て、幼兒に何事をか教ゆべき處と看做し、若し幼兒を幼稚園に托すること半年にして、何事をも學び來らざるときは、幼稚園は何の役にも立たぬ處なりなど、不平を漏らすこと無きにあらず。高等師範校若しくは尋常師範校の附屬たる幼稚園は、父母の不平よりして多少の退園者を生ずとも、これが爲めに狼狽周章して、幼兒取扱方を變更するが如き事なかるべしと雖も、多少の月謝を集めて、僅に維持し居るが如き微々たる幼稚園に至りては、五六の退園者を生じても、直に其維持法に大影響を及ぼすが故に、忽ち狼狽周章して、幼兒取扱方を變更し、幼兒に智識を詰め込むことの非なるを知りつゝも、強て何事をか教へんとし、肝要なる躰育を二の次として、智育に偏するに至る、實に恐るべきの極にあ

らずや。
大工の八公、魚屋の熊公と湯屋の板の間に會す。放言壯語して曰く、今時の學校だの、幼稚園だの、何の役にも立たねへ、差配の子は幼稚園へ行きだしてから腦膜炎てへのに罹つて、顏の色は眞靑だ、區長さんの坊ちやんも幼稚園で卒倒したてへのでモー退園てる、己れの所の餓鬼ァ、我儘放題をさして遊ばして置くから、あの通り肥りやァがつて、力士のやうだ、何でも小供は遊ばして置くのが一番善いんだチー。
八公の言、眞理の半面を道破せりと謂ふべし。幼兒に學問智識を詰め込むことの非なるは、實に八公の言ふ通りに相違なし。然れども、若し幼稚園の幼兒取扱方にして其宜しきを得ば、八公の子の如く我儘放題に遊ばせ置くよりは、幼稚園に托し置くこと遙に優れると言ふ迄もなし。
蓋し幼兒の我儘放題に遊ぶと云ふも、相撲の眞似、飴屋の眞似、大工の眞似、兵隊の眞似などは、有益無害なりと雖も、火事の眞似、盜賊の眞似、娼妓の眞似などするときは、如何に無邪氣なる幼兒なりとて、感心し難きなり。況して八九歳にもなりて、未だ就學せざる小兒の如きは、他の學齡以下の幼兒に惡智慧を付けて、父母に食物、錢などを強請らしむるとあり、鄙猥なる言語を習はしむるとあり、教唆煽動して、種々雜多の惡戲を爲さしむるとあり。此の如き弊を避けんと欲せば、是非とも幼兒を幼稚園に托せざる可らず。而も現今幼稚園の多くは、頑童中に惡戲を習はしむるよりも恐るべき大弊あるを知らば、世の父母たる人は如何せんとする乎。
斯く論じ來れば、世の父母たる人々が、有益無害なる幼稚園を待つと大旱の雲霓を望むが如きを知るべし。即ち幼兒に學問智識を詰め込むとを勉めずして。身躰教育、性情教育を主なる目的とするの幼稚園を待つと

極めて切なるを知るべし。世の幼稚園に主幹たる人、幼稚園に關係ある人、以て如何と爲すや。



科學

活動幻燈見物所感（炭酸瓦斯）

天水生

先日余は友人に誘はれて有名なるエヂソン氏の發明にかゝる活動幻燈（Vitascope）を見んとて神田の錦輝館に至れり正に午後六時にして幻燈の始まるには尚一時間を經過せざる可からずと云ふに既に場内は夥たゞしき來觀者を以て充たされ殆ど立錐の空地とて無き程なれば余等は群集の背後に辛うじて膝を容るゝを得たれどかゝる多人數の押し合ひ迫し合ふ内に余等は恰かもすし詰にせられたる如くなりきやがて七時勇壯なる奏樂と巧辯なる説明者の演説ありて驚くべき不思議なる活動幻燈始まる人の歩む所より馬の驅る所船の動く所火の燃ゆる所水の流るゝ所に至るまで凡て皆眞に逼らざるなく恰も實物と實景を目前に見るが如し、これは寫眞を幻燈にうつしたるものなれば實物に似たりと雖通例の寫眞とは大に異れり此寫眞は一秒時間に何回と云ふ速力で物の運動して居る有様を續けて寫せし幾枚の早取り寫眞の種板を長く連續せしめ之を同筒狀に巻きつけて速に廻轉せしめ電氣の光を以て幻燈の如く大なる白布の上に寫せるものなり、かゝればこそ剎那の動作にても實物と同じ形に寫し取れる、即ち寫眞術の進歩なり

而して電氣は幻燈の光を造るに用ゐ又原板を廻轉するに用ゆれども別に電氣仕掛で寫眞中の物躰が動き出さしむるにあらず錦輝舘にては電氣の原動力を造るに石油發動機を用ゐ川上座も此幻燈を見せしがこゝは原版を廻轉するに電氣力によらずして人力に依れり

余は種々なる光景を目擊して感嘆に絶えざりしが暫時にして呼吸苦しく頭重く氣分悪くなりぬこれは電氣の光が餘り强過ぎて何か電氣の作用の如くに思はるれどさにあらず大勢の人が入り込みて空氣が不潔となり即ち有毒なる炭酸瓦斯の積欝したるがため也

抑人の生命には呼吸を要す呼吸によりて肺の中に流入し來る血液を淸め躰内の新陳代謝を盛にし熱を發して躰を温む空氣は酸素、窒素なる二種の瓦斯より成立ち其中呼吸に大切なる瓦斯は酸素なり血液を酸化して淸める作用は此瓦斯なるが故に肺中に吸入せし空氣中の酸素の何分は此作用に用ひられ呼出する空氣の中には酸素の量を減じ其代りに躰内より排泄物なる炭酸瓦斯を吐くされば呼吸する毎に空氣中の酸素の量は減じて炭酸瓦斯が增すこれも一人か二人なれば炭酸瓦斯が出ても空氣の流通により新鮮なる空氣と代謝すれど數百人一所に集れば其呼出する炭酸瓦斯の量多くて盡く新しき空氣と交換すること能はず增々此瓦斯溜り入躰に必要なる酸素に欠乏を生ずる故に呼吸苦しく頭重くなるなり因に曰肺より呼出す空氣の中には炭酸瓦斯の外に有機質の毒物を含み一層害毒を及す獨逸の有名なる衛生學の泰斗ペッテンコーヘル先生は一羽の鳥を密閉したる箱の中に入れ食物、水を充分に與へ其箱の兩端に小孔を穿ち其鳥が呼出する炭酸瓦斯と外部の新鮮なる空氣を充分に入れ換へ得るやうにせしが鳥は二三日の内に斃れぬこれ食物欠乏の爲にあらず又炭酸瓦斯の溜つた爲ならず全く鳥が呼出する空氣の中に他の有機質の毒物が死因となりたるものなりと

古井戸、穴藏酒藏等には屡々炭酸瓦斯が滯積す此內に入れば氣絶して死に至ることあり故にかゝる所に入るには前以て炭酸瓦斯の有無を試驗することこそ必要なれ即ち長き棒の先に蠟燭をつけ之に點火して此內に入れ若し其光力の弱くなるか又は火の消ゆれば炭酸瓦斯の滯積せるを證す火の燃へるのは空氣中にある酸素の作用にして炭酸瓦斯の多量の所には酸素の少量なるが故火の光が弱くなり又は消ゆる也

炭酸瓦斯は有毒なる瓦斯に相違なけれどクロル瓦斯、亞硫酸瓦斯のやうに猛烈なる毒にはあらず人が炭酸瓦斯の滯積の處にて氣絶し又は死を致すは中毒よりと云ふより寧ろ生命に必要なる酸素の欠乏より來れり炭酸瓦斯の毒にならぬ證據は之を水に解して飲めば却つて消化を助けることあり「ラムチ」は即ちこれ也、炭酸泉は天然に炭酸瓦斯を含みて湧き出る水なり

炭酸瓦斯は何處の空氣の中にも多少含めり其量は通例戶外の新鮮なる空氣の中には大抵一萬分の四乃至五程人の多く集る市場、劇場、寄席等の空氣は此れよりも勿論多量也故に空氣中の炭酸瓦斯の分量は酸素窒素の分量の如く一定せず時と所により差等あり

空氣中の炭酸瓦斯は全然人の呼吸より成立するものならず人のみに限らず生命のあるものは動物も植物も呼吸の時は必ず多少の炭酸瓦斯を出す又薪木石炭等を燃す時も成立し又有機物の腐敗する時には必ず此瓦斯を生じ酒を釀造する時にも成立す酒藏に炭酸瓦斯の溜る事のあるも之が爲なり故に酒藏では空氣の流通に殊に注意を要す又地中よりも多少此瓦斯を生ず即ち水中に解け出づるものは炭酸泉なり

炭酸瓦斯は空氣より重きが故に穴藏古井戶等の底に溜る、其化學成分は炭素一分と酸素二分との化合躰なり

炭を燃せば何故炭酸瓦斯が出來るかと云ふに炭は主に炭素より成り之を燃せば空氣中の酸素と化合し炭酸瓦

斯を生じ此際熱を發して赤くなるなり
炭酸瓦斯は動物には無用有害なれど植物には必用なり此れなくば植物は生長すること能はず植物躰の大部分は炭素より成立す此炭素は殆ど皆空氣中の炭酸瓦斯より吸收す即ち植物の葉には氣孔と云へる小なる孔あり(氣孔は裏面に多し)炭酸瓦斯は氣孔から葉の實質の中に入り込めば中なる葉綠素と云ふ色素(植物の葉に綠色を與ふるもの)は日光と共力して之を分解し炭素と窒素となし酸素は之を吐き出し炭素は之を躰中に取り込み根より上り來る水及び無機鹽類と化合して種々の複雜なる物質(澱粉、砂糖、蛋白質、脂肪の如き)を造る之を同化作用といふ植物には同化作用の外に呼吸作用あり而して此作用は動物の呼吸程著からざれば昔の學者は之を知らず同化作用を以て植物の呼吸作用なりとし植物は炭酸瓦斯を吸ひ酸素を出すにより動物とは反對の呼吸をするものだと思惟せるが如し同化作用は晝間日光のある處に於て植物躰の内にて葉若しくば若き莖の如き葉綠素を持て居る部分ならざれば爲すこと能はず、之に反し呼吸作用少時たりと雖も之を停止するを得ず晝夜の别なく之を行ふ
同化作用を別言せば植物の消化作用なり炭酸瓦斯は其食物なりかく動物には無用なる却て害になる炭酸瓦斯を植物が吸ひ炭素のみを取つて之を已れの大切なる養分とし酸素を出し動物の呼吸によりて不潔にせられたる空氣は植物の爲めに清潔に化せらる若しさなくば空氣中には漸々炭酸瓦斯の量增して終には我々の生命絕ゆるに至るべし故に庭園等に樹木を植へるのは單に風致を添へるのみならず又空氣を清潔にするの大なる功用ある也


虚無僧

史談

縣門の三才女

其の字生

德川昭代の女學、語るべきもの、傳ふべきもの、一にしてそれ足らざるなり、麗々花の如きの人、踵を接して一時にあらはれ、各々其才を恣まゝにせし、共に其筆を巧みにせし、實に王朝のいにしへ、名媛朝に並びし日にも、蓋しまさるあつて及ばざるなし、されば我が號を重ねて、茲にこの紙上に語りし、かの四俳女のことの如き、或は百合玉瀾のことの如き、わづかにそが一斑にすぎざるなり、今また筆を新たにして、こゝにこれをいはんと欲す、縣門の三才女のことの如き、まことに以て多とすべし。

三才女、一つは花の如く、それ麗に、一つは月の如く、それ清に、然して、一つは雪の如く、それ潔に、おのがしゝ獨特の想を練り、三美こゝに一つとなりて、大ひに師翁が門を飾りし、まことに古今文學史上の、美談としつたふべく、奇話としてそれつたふべし。

さて、其三才女とは、そも誰々ぞ。

名は、割合にあがらざりせば、人の或はこれこれぞと、言下にさとるものあらざるべし、或は加賀の千代女の如くに、又は丹波の捨女の如くに。

されど、其質の大ほひなる、其實の大ほひなる、却つて彼等兩者にも、いかでか等しからざらん。請ふ、其事蹟について、これを察せよ。

曰はく、倭文子、伊勢の人、松井平右衛門が長女なり、生れて英悟人にすぐれ、幼なきより文雅を好み、ことに和歌敷島の道を嗜み、これを學ばんことをいと志は〳〵、父に請ひ、又母にもとむ、されど、父も母も、斯ること、女には要なきことよと、請ふたびごとに、

もとむ日ごとに、何時もすべて退けて、更らに許すやうもなかりしを、倭文子、いとも本意なく、悲しく、いよいよ請ふておもひ止まず、ます〱求めて日は日につぐ、さればとて父母のはじめてゆるし、即はち其頃の大名家、嘖々今に到つてつたふなる、加茂眞淵翁が門に謁して、玆に師弟の約をなし、敎を求め點を請ふ。

日頃年頃の願ひ、玆にやゝ成りて倭文子の喜び、晝夜たゆまずおこたらず、讀書三昧に入り、吟咏常に眠食をわすれ、孜々としてつとめ、また兀々としてはげみたり。

されば、技能日々にすゝみ、才識月々に磨かれて、長足の進歩、忽ちにして人を凌ぎ、門下同人の間に稱され、師翁眞淵がために惜まる。

由來才藻の人にすぐるや、忽ち志たり顔におのれを高ぶり、遠く及ばずと世をさげしむもの、比々皆然り、殊に女流に於て其弊多き、小町が如きすでに然り、清女が如きすでに然り、其他世に知られざるもの、名のなきもの、もしこれをこれ漁さり求めば、蓋し其數、百を以て數ふべく、千を以て數ふべきかな。

古語にいふ、才子才のために倒ると、實にこれこれを戒しむの金言なり、小牡鹿のいとほこり氣なるものあり、枝させる頭上の角を谷川の、水にうつしてつく〲ながめ、さても美しきかな、うるはしきかな、天下いづれにかまた、其美しきこと斯の如く、其うるはしきこと斯くの如きを、持てるものゝあるべきやはと、大ひに驕りうれしみ居しに、折しもあれ、狩人の筒音たかく、森の木蔭より聞えしに、如何でか鹿の驚かざるべき、狂はんばかりに驚きおそれ、方角さへも知らで逃げ行きたり、走ること凡そ數百歩、道に藤葛のまとひ下れるものゝありしに、例の角はたとかゝりて、ふるへどもはなれればこそ、あがけども取ればこそ、

いよいよかたくからまりて、遂には全たく動き得ず、走り得ざるに到りしところ、狩人の玆に追かけ來りて、何なく捕らへかへりしと。

これ、古しへの哲人が、爐邊の瑣談、ことを通常の比喩にとりて、人世處世の秘訣、その解しがたきところのものを、いとも解しやすく教へしものなり、誰か、其才に倒れ果てし時に當りて、其枝なせる頭上の角を、却つて恨みかこたざるもの、世にそれあるべしや、我問はん。

實に、戒しめても、なほ戒しむべきは、豪慢不遜のおこなひなり。

また、守りても、守るべきは、謙遜自讓の德なりけり、かつてきく、艱難爾を玉にすと、我れは玆にいはんと欲す、謙遜自讓、美德以て爾を玉にす、それ守れよや、守れよやと。

言ふは安く、行ふは難し、堂々六尺の男子にして、なほ守り難く、やぶれ易きを、世に淺はかとうたはれたる、巾幗婦人の身にありて、この美德あるもの、敗れざるもの、すでに此一つをのみ以て、世につたへいふに足る、されば、其道に於て、其志せる處に於て、成功なせしもの、豈それ偶然にあらざるなり。

偉とすべきかな、才女倭文子、多とすべきかな、名媛倭文子。!!!

父母に孝に、師に忠實に、友にあつくして、また其家に召しつかふ、下女はした女に對しては、詞和かに然も親切なりき。

されば、見る人のこれを賞し、聞く人のこれをたゝへて、賢少女との風潮四隣にたかきに、父母はいよいよいつくしみ、掌中の美玉、まこと世の人の持たざるものを、持てるが如き思ひふかくて、荒らき風にもあてざりしと。

然かも亦、花顏嬋娟として、世に過ぎしは、さながら

に錦上花を添ふとやいはん、實に然り、錦上花を添ふといふべし。

年十五にして、某侯の夫人に仕かへ、十八にして家にかへり、母に伴なはれて、上野國伊香保に浴す、往還のみち〳〵、目に見、耳にきくところ、滯在の日、心に浮ぶことのかづ〳〵、たゞそれとなく、書きつらねたるもの、凡べて三卷、題して伊香保紀行といふ、實に倭文子が初作なり、文躰清絶、更科十六夜の妙をも凌ぎ、男子も及ばざるの風致あり、當時の人、これを上東門院の女房に比べし、決して過譽にあらざるなり、實に至當のことなるべし。

さるを惜しいかな、惜しいかな、嗚呼實にそれ惜しいかな、奇才天の却つてねたむか、齢を此才女に多く借さず、寶曆二年七月十日、遂ひに世より奪ひ去れり。もし、世にあること今十年、或は十五年ばかりだもせば、如何に見るべきものゝありし、如何に聞くべきものゝありしを、如何なれば斯くも、世に短かき、隔世の我れ、其傳を讀んで玆に到るや、いまだかつて卷をおほひ、長大息せざるものはあらじ、（近年に於ける、賤子、一葉二女史の如き、何ぞ其ことのよくも似通へる、恨みは、今にのみ限らざるなり、昔も今の如きかありし、嗚呼これをしもこれ、天の命といふべきか、天の命、何ぞそれ、恨めしき）。

病いよ〳〵革まり、時臨終に近づきしに、いたくも其父母に先だつことを、悲しみなげきて、一首の和歌、せめてはなきあとの、御心慰めにもと、讀んで殘しをきたるもの、却つて父母の心を千々せしむ。

　桐の葉のことなと人はいふめれど
　　しばしばかりや急ぐなるらん。

遠近の文人、知るも知らざるも、これを惜しみ、これをなげきて、詩歌文章、いづれも追悼の心をこめ、これを贈りて其意を表はし、師翁眞淵の墓銘を撰べる、

いさゝか以て瞑すに足るべし。

おくれたる父母の、涙玉なす眼もわきがたきに、平生そのつくりなせる遺稿を輯め、これを知人の間に別ちし、坊間今に到りて時に見る、文布上下二卷なり。前途多望の才女、僅かに其齢二十を以て、眠るが如く逝きしもの、青苔其碑をかざりて、深川本誓寺の後ろにあり、年々歳々、片見の花は咲いて散りて、あと吊ふ人々の、心をいよいよ悲しからしむ。

曰はく、よの子とて、鵜殿孟一が妹なり、紀殿に仕へて瀬川と呼べり、歌集一卷、さは川と題せしは、即ち彼女が一代の口ずさみ、いうに師翁が流に叶へり、其他、木曾路の記一卷は、行文流麗、倭文子が、伊香保の紀行と共に、蓋し縣門をかざるに足るべし、漢學にさへ、たしなみ深く、むづかしき詩賦さへも善くせりと、すべての史家のこれをつたふ、またこれ、一個の奇才女なり、それ賞すべし、つたふべし。

曰はく、茂子、彼女は江戸の市家に生る、いつしかに、あがた居の門に入りて、其名を筑波子とはいひなせり、是れ、師なる翁がよみ歌に、『筑波山、はやましげ山云々』といへるに因みたるものなり、後ち、進藤正幹が手に養はれて、土岐頼意といふに嫁げり、尤も和歌にたくみにして、其伎倆、或は倭文子、よの子にも、おさ／＼劣るものゝあらざりしと、師翁のこれをつたへかたれる、何のうたがはしきものゝあるべき。

以上の三者、これこの章の初にいひし、縣門の三才女なり。

明治の昭代、盛んに女學者のいづるあり、されば又、古を今に比らべ見て、或はこれ等になぞらふべきもの、蓋しそれ、なきにしもあらざるべし、なきにしも亦あらざるべし。

英國二大女詩人（二）

岡田紫櫻

（二）「インゼロー」孃

余は曾て英國第一派の女詩人として「ブラウニング」夫人を讀者諸君に紹介せり。夫人が「テニソン」に次ひで出で「テニソン」と共に文界の一明星として輝きたりしが如く今又夫人に代つて詩界の光明たりしものは即ち「インゼロー」孃なりとす。一千八百六十一年の英國詩界は詩神「テニソン」を有したりしも其好偶「ブラウニング」夫人を失ひたりし、然るに「ヂーン、インゼロー」孃なるものありて夫人に次ひで出で能く其席を充たしたり。詩人及び小說家、「ソングス、オフ、セブン」の作者として廣く世に知られたる「インゼロー」孃は實に「ブラウニング」夫人沒后に於ける第一流の女詩人なり。

孃は一千八百三十年？（或は二十年と云ひ或は二十五年と記す、元より其月日の如きに至つては之れは知る可からず）を以て英國「リンコーンシーア」の「ボストン」に生る。父は「ウイリアム、インゼロー」と云ひて當時可なりの生計を營める銀行家、母は「アベルヂーンシーア」より嫁し來りたる敎育ある婦人なりき。故に孃は自己の手腕を以て生活するの困苦に陷るの憂なかりき。孃は十一人の同胞と共に極めて樂しき家庭の中に人となりたり。已に其出生の年に付て多くの傳記家の說を異にせるを以ても見るべきが如く孃の一身上に關して吾人の知れる處甚だ稀なるは遺恨の事なり、然れども其小女時代に付て自家の物語によれば概して快活なる心を保ち事物を見て其新奇なるに驚き、天上の星を指して母に其理を尋ぬる等凡て一般の小兒と格別異なる處なかりき。室の隅などにありて獨り靜かに默想する時には間々心中非常なる愉快に滿さるゝとありたり。されど性來甚だ怯弱にして常に恐怖の念を

懐けり。嬢が幼少のとき住みなれし室は河の上にありて、嬢は一人の兄弟と共に流水の有様を見て之れに驚きぬ。潮の満退、舟の上下、水面より反射せる日光の美はしさ、天井に映れる波の影など悉な彼等二人の好奇心を衝動せざるはなかりき。

後年嬢が「ロンドン」の「ケンシントン」にあるや居住は如何にも多趣にして多くの小さき室を有し、美はしき野草の花は家屋を圍みて植付けられたり。此天然の愛見たる女詩人、此閑栖の主「インゼロー」嬢とは如何なる人乎。嬢は順和優麗、士には愛すべく、兒には近くべきの容貌の内自ら一種の威嚴を備へり。其心は殆んど無限の同情を以て充たされ、其風采は萬人の仰慕する處なり。其頭腦は實に女子には多く見ざるの知識を蓄へ、以て十九世紀の開明なる英國女子の模型となるに足るなり。此素養あり、情緒あり、禮儀ある好女詩人は此「ケンシントン」の住ひに於て、各日午前を以て文筆の業に從事し午後に於ては一句を綴ることだに甚だ稀れなり。嬢は己のが什を直ちに社會に出すを好まず、出來得る限り永く之れを坐右に存し置きて間々之れを修正添削せんことをつとむるなり。されど嬢や性質謹沈にして揚氣ならねば試みに或事をなすなどのことなく、其句を綴り、詩を屬するに由つても一種の感動によりて之れをなすなれば一たび完稿したるものは再三再四讀誦して之れを改正するなどのこと殆んどなし能はざる處なり。

嬢は兼ねて「テニソン」と「ブラウニング」夫人の詩集を愛讀せるものゝ如し。之れ吾人が注意して嬢の詩を味ふときに當つて明らかに認め得る所なり。然れども嬢は決して他人の作物のみに依賴して自家殊得の長處なき世間の所謂詩人の如きものにあらずして、實に能く殊得の妙處を發揮せり。嬢の詩集の能く大西洋の兩岸に於て廣く流布せらるゝに至れるもの其用語の難解な

るが故にあらず、其詩句の學者風を存するが故にあらず、果た又議論の深遠巧妙なるが故にもあらずして思想の嶄新なると句法の殊異なるとにあり。否な寧ろ此等のものよりも遙かに重要なる影響を與へたるは只其滿腔の同情をして詩篇の全躰に含蓄せしめたるにあるのみ。孃は天然の信仰家なり。故に花に空に水に山に森に凡て萬有の中に美を味ふなり。若し又魚鳥の如き有生物を見るあらば孃の心は一種の神氣を以て打たれたるが如き感を起して悦喜なす處を知らざるに至るなり。之れ全く同情の厚きに基するものにして下等動物に對する已に斯くの如くなれば其同輩たる人類に向つての同情深切は元より云はずして計らるべきなり。孃が同情の厚きを知らんと欲せば其單に詩人としてのみならず其他多くの方法によりて世のため人の爲に盡力せしを見るべし。孃が嘗て其原稿料として書店より受取りたる金を以て食物を調へ之れを哀れむべき病身なる貧民に自由に施し、之れを名づけて版權の飯(Copy-right dinner)と呼びたり。斯くして孃は一週日間の中幾度か病院なる哀むべき貧民に施與をなしたり。嗚呼此多情多涙の眞女子が如何に小兒を愛する乎。實に孃は小兒に對しては非常なる同情を有し、其思想に於て其遊戯に於て果た又其困難に於て小供の心事を思ひやる時は自らの已に老ひたるも自らの才能學殖あるも全く忘却し去るなり。孃が有名なる多くの於伽噺は全く此心情に因れるなりと云ふべし。

吾人は散文家殊に小説家としての孃を認めざるを得ず、孃が散文の見るべきもの有名なる小説「チブ、ゼ、スクリッヂ」あり、又小供のために書かれたる多くの於伽噺あり。然れども孃は到底詩人なり。今一層之れを限れば抒情詩の作者なり。孃の詩は常に一種殊異なる質朴温順の調を有するが故に自ら餘韻嫋々たるものあり。孃の作中「チリス物語」などは早く出版されし

も、孃をして英國第一流の詩人として認めらるゝに至らしめたるものは一千八百六十三年即ち「ブラウニング」夫人沒后二年に於て世に公にせられたる一卷の詩集なりとす。之れ其兄弟「ゼチルヂ、ゲー、インゼロー」に捧げられたるもの、卷首に記して曰く「卿の親愛なる姉妹は其勉强と卿の名とを結び合するの欣喜なるに加へて其愛情を表示せんがため此等の詩篇を卿に贈る」と。此詩集の版にせらるゝや「インゼロー」孃の名は英國の天地に轟き、次ひで大西洋の彼岸に波及して數萬の崇拜者を有するに至れり。(げにや此書實に二十版の上に出でたりと云ふ)。爾來孃は數卷の詩集を公にせしも一として六十三年刊行のものに勝れるの歡迎を受けたるはなかりき。其調の質朴溫順なるは詩に餘韻を生ぜしむるの源なると同時に社會一般の人に歡迎せらるゝ所以なり。孃の詩篇中最も著名なるは「ソングス、ヲフ、セブン」(婦人生涯の七時期を謳けるものなり)、「夜警」、「リンコンシーア沿岸の高潮」、「鳥の聲」等なりとす。余は不幸にして未だ多く孃の詩に接せず只僅かに其有名なるもの兩三篇を觀過せしのみ。然れども「夜警」の如き「リンコンシーア沿岸の高潮」の如き何れも句調は流暢にして用語は穩當なりと云ふべし。又多くの有名なる詩人文學者中に普通に用ひらるゝ深遠難解なる外國文字の挿入と誇學的文句に代ゆるに純然たる英文字と通俗的會話的の句を以てしたれば讀誦するの間何となく一種の快味と親近とを感ずるなり。此二篇中后者は殊に脚本的の要素を含めるを見る。

米國の批評家「エドモンド、クラーレンス、ステッドマン」孃の詩を評して曰く「ブラウニング」夫人の聲の止むと共に「インゼロー」孃の唱歌は初まりて、直ちに社會の耳かたむくる處となれり。此等の歌は恰も英國田舍に於ける、黃金色の雛菊もてかざられたる、荆棘にて界せらるゝ牧野より飛び昇る雲雀の如く突然に而か

も調子善く歌ひ出でられたり」と。吾人は之れに加へて孃の詩は敬虔の心を表し、全躰に於て女子の殊色たる和順優柔の影を止むるを言はざる可からず。

孃の詩は眞詩なり、何となれば其心の自然の發表にして僞なきの寶玉たればなり、孃が一生の懐抱名譽にあらず、富にあらず唯一正義の道を歩むにあり、孃は詩人なり、眞女子なり。

孃は「ブラウニング」夫人と共に身躰健ならず、故に冬日は佛國の南部及び以太利に於ひて送るを常とす。

余は孃の傳記を研究するに當つて其出生の年と其詩集其他の著作出版の年月の外何等の年月に關するものを見出す能はざりき。孃の一身に關して人の知れる處蓋し極めて少きならん。然れども孃は今尚ほ英國にありて生存せり。是れ或は世の傳記家たるものゝ殊に其私行を記するなき所以ならんか。兎に角余は孃を以て「ブラウニング」夫人に比する能はざるも、夫人没后に於ひては英國女詩人の第一位にあるものと斷じて不可なかるべしと信ずるものなり。

〰〰〰〰〰

春景十五句　　なにがし撰

遠淺に人の小さき汐干かな　ゑつ女
おり／＼は留守の門たゝく柳かな　たま女
墓原やはゝが片見の櫻さく　民子
菜の花や姥が餅うる宿はづれ　峯女
川むかふ霞の中に歌の聲　やな女
なかき日を京へゆきゝの飛脚かな　さし子
山門をはいれば柳櫻かな　たか女
蝶ゝのまひこんで來る御使者の間　路子
うらゝかや手にさる如き淡路島　さし女
文机によりて居眠る日永かな　てる女
高縄にすけ笠つゞく春のかぜ　はる女
石川やせみの小川の春の水　たへ子
里はみなれて仕舞けり朧月　季女
春雨にたきものかほる小路かな　たれ女
飛石にそうてさきけりつほすみれ　波子

〰〰〰〰〰

論説

女子高等教育の急務

（女子大學校設立の趣旨）

成瀬仁藏

今や戰勝後の日本は、政治、外交、社會、其他種々の問題、國家百年の經營、山の如く眼前に横はり、是等の問題の爲めに日夜研究を凝らし、日も亦た足らざるが如し、而して其の問題の內には必ず敎育に關する問題あるべし、何となれば他の諸般の問題を眞に研究せばその歸着する所敎育にあり、萬般の事是非善悪その元に溯れば必ず敎育に歸着せざる可からず、國家の盛衰消長する所以のものは、其の基礎其の本源眞に敎育に在り、而して國の滅亡するに二の原因あり、其の一は外より來る所のもの、其の一は內より起る所のもの。

外より來るものは兵力なれど、同じく兵力を以て防ぐ事を得れども、內より起るものは隱微不識不識の間に徐々として來り、恰も深夜熟睡の間に洪水の襲來するが如し、實に油斷すべからざる强敵なり、此の敵を防ぐには敎育を差措いて他に道なかるべし、敎育は啻に是れを防ぐのみならず、國家をして安全强固の發達を遂げしむるものなり。

古今東西の差別無く敎育の振るへる國は繁榮し、敎育の衰へたる國は衰亡せり、往古波斯が西亞に雄飛したりし頃、乘馬に巧みに弓術に長け虛言を戒めたる希臘の敎育主義が能く此の大敵を歐洲の天地より一掃するを得たり、是れ即ち彼の尙武主義敎育の功に依るなり、殊に女子敎育の功に依る、能く人口に膾炙せる「汝之を以て戰へ然らずんば此の盾に乘りて歸れ」とは、是れスパルタの婦人が其子の戰場に向ふの際、盾を與

へて戒めたる語にあらずや、希臘は先づ此の精神を以て婦人の頭を形造れり、羅馬の尙武的敎育の旺盛を極めたるは、羅馬膨脹の時代なり、德川將軍繁榮の時代は敎育を重んじたるの時代なり、敎育に依り國家の興亡したるは、其の實例希臘羅馬の歷史に徵して明かなり、歐米各國今日の形勢は、各競ふて敎育を重んじ、敎育を盛んにす、佛蘭西の敗軍、獨逸の勝利は、敎育の勝敗なりと謂ふ、佛蘭西が敗軍恥辱を蒙りし以來は、大に敎育——殊に女子敎育に着眼せり。

然るに戰勝國たる我國の現狀如何、振張せるか、完備せるか、今日の狀况にて滿足し得べきか、抑國民を敎育するに四の要素あり即ち天然、學校、家庭、社會天然は國民を敎育するに最も有力なる感化を有し、濫に人意を以て動かす可からざれば玆に論ぜず、何人も敎育といへば直ちに學校に着眼す是れ如何、試に我帝國と北米合衆國を比較せよ、日本は四千萬の人口を有す、然かも大學校二、高等學校六、女子の高等學校は唯だ一の女子高等師範學校あるのみ、他に一の高等學校ある無し、又大學には女子の入學を許さず、合衆國は六千萬人の人口を有し、大學校三百五十七、女子の入學を許すもの二百十七、其の入校の割合男子六十に女子四十、我が帝國は女子が大學の程度に達せざれど男子九十一に女子一の割合なり、中學は男子九十人に女子十人、米國は男子四十人に女子六十人、師範學校は男子十七人に女子八十三人の割合、亞米利加を旅行せしもの全國皆な女學校なるに驚かん、而して普通敎育は如何、我が帝國就學兒童は四十にして、餘の六十は無學兒童なり、又た敎育家の缺亡を告ぐる事非常なり、四千萬の人口を有せる帝國に僅に二個の大學を以て足れりとし、僅少の高等學校を以て足れりとし、殊に女子の爲めには憐むべき學校を以て足れりとするを見ては、吾人常に長大息に堪えず、吾人が最も悲む可

きは我國敎育の精神衰へ、學校は智識と德行を與ふる事言を須たざれども、却て人物を悪作するが如き觀念を抱かしむ、殊に女學校の弊害を傳ふるや甚だし、之をば直ちに學校の過失に歸するは、聊か亦甚だし、其の責の半ば家庭に在ることを忘るべからず。

或敎育家は、敎育は遺傳七分、敎育三分なりと云へり、斯の如く遺傳は敎育上肝要なるものにして、遺傳は家庭に於て作られ、學校は其遺傳を生育せしむる所なり、小學中學も其の敎育の全權は遺傳に在り、或る敎育家曰く、小兒の敎育は生前二十五年前より始めざるべからずと云ひしは、父母の敎育を意味せしものなり、又た小兒が學校敎育を受くる樣に成り、又少年となるも、家庭敎育は敎育の半分を負擔し居るを忘るべからず、之を忘却して學校の敎育に一任するは誤りの甚だしきことゝいふべし。

然るに敎育の事業を全うするには、學校と家庭のみに滿足すべからず、必ず社會敎育の力を要す、然れど目下の社會は却て敎育を妨害するにあらずや、見よ少年少女を腐敗に導びく勢力は强大に、機關は完備し、文學演劇遊樂交際等に至るまで、奢侈、淫逸、遊惰の悪習、輕薄、懦弱、射利、衒名の弊風は各勢力を逞しうして、蠟の如き柔軟なる少年の腦髓に不道德の印象を捺すにあらずや、然るに之に反抗すべき社會敎育の勢力は頗る微弱なり、米國は大に此方面に力を竭すを以て其の機關も備はれり、例へば圖書館の如きは都鄙の別なく到る所にあり、其の書籍は日夜非常の働きを爲し一の家庭の巡回敎師となれり、又通俗講談は時々之を催して社會の開發を促せり、我國には圖書館唯だ一あるのみ、通俗講談は大學通俗講談のみに止まれり、然かも之れすら社會的敎育力とならず、米國にては日曜學校や大學殖民と稱するもの盛に行はれ、其他音樂といひ、美術といひ、大に敎育的勢力を振るへ

り、然るに我國にては社會的敎育は殆ど其の端緒にも就かず、その勢力とも成るべきもの丶、却て大敵となれるは慨すべきの至りならずや。斯の如く敎育の振はざるは詮ずるに敎育の精神衰へたるにあり、敎育が器械的に流れ、形式的に陷れるは、敎育の精神既に衰へたるが爲めなり、熱心に眞面目に敎育學を研究するもの少なく、又發賣書籍中敎育書類最も賣行少きといふは、敎育の精神の衰へたるにあらずや、精神なき身躰は死せるものなり、精神なき敎育は生命なき敎育なり、故に我國の敎育は、學校敎育も、家庭敎育も、社會敎育も、皆な精神なきといふを敢て憚らず。

我國敎育の不振を震起し、不完全を完全にし、不熱心を熱心にするには、必ずや敎育の精神を社會全班に鼓吹せざるべからず、此の精神を鼓吹するには、必ずや女子敎育を普及せしめ、改善せしめ、發達せしめ、完備せしめ、女子に敎育の精神を鼓吹するを要す、敎育中最も不振のものは女子敎育にして、世人の厭棄排卻するものは女子敎育たり、世人の最も冷淡に對遇するは女子敎育なり、女子敎育といふ語さ丶之を聞く時は世人をして慄然たらしむる有樣に至れり、斯く女子敎育が不遇の有樣に陷り、不振の狀態を招きたるは、一は社會の罪別言すれば男子の罪、二は女子敎育失敗の罪別言すれば弊害の罪なり。

吾人は此現象を見て一大不幸となす、吾人敎育に從事するもの、弊害有れば有る程、不完全なれば不完全なる程、愈之に熱誠及び勤勉を致さゞるべからず、吾人が女子大學の設立を企つるも此意に外ならず、吾人が敎育の主義方針手段に就いては別に說あり、只だ今日に於て女子高等敎育の急務なるを論ずるのみ。

述懐　静の前

ありすさびの惡きだに、
　ありてのあさは戀しきに、
飽かで離れし面影を、
　いつの世にかはわするべき。

＊　＊　＊　＊

よしの山、峯の白雪ふみわけて
　いりにし人のあさぞ戀しき

文藝

マリチク、ス、パリチク

トルストイ伯著

有坂生譯

或る貧しき人七人の童兒を有ちしが最も年長けたる兒より順次に段々に小くなりて一番少きものは其生れし時小指よりも大ならざる位に小さかりき、此故に人この兒をマリチク、ス、パリチク（小指の樣な童兒といふ意）と呼べり、されどマリチクは躰は小くても中々さかしくて鋭敏なりき

父母は追々に貧しくなり後には何もなくなりて子供等を養ふこと能はざる樣になれり、父母は共に色々に考へ樣々に思案して終に子供等を遠く森林の中に連れ行き其處に棄て置きて家に歸へることの出來ぬ樣にせんと決したり

父と母が此事を相談してありし時にマリチクは眠らずして悉く其話を聽き取り翌朝何人よりも早く寢床より起き出で小河に走せ行きて衣嚢に一ぱい白き小石を拾ひたり、父母の子供を森に連れ行く時にマリチクは一番後より隨て行き衣嚢より小石を一つづゝ取り出して之を路に落し置けり

父母は小供等を遠く森林に伴れ行きし時にそこにのこし置き村に行きて而して逃げ去れり、子供等は之を尋ねて呼び求めたれども何人も來るものなかりしかば終

に泣き出しけり
されど唯だ獨りマリチクは泣かずして細き聲にて
『お泣きなさんな、私が汝等を此森林から連れ出す
から』
と云ひたれど兄弟は其語の聽えざりし程に聲高く泣けり、マリチクの云ふことが彼等に聞えし時に彼は彼等を森林の中より連れ歸へらんため路に石を落し置きたることを話しければ彼等大に喜びて其石より石に傳へ行くマリチクの後につきて共に家に達せり、
父と母が子供等を森林に棄てたる丁度其日に父は偶々金を儲けしかば母と共に
『何故、吾等は子供を森林につれて行たらうか、子供は多分失はれて仕舞たであらう、金があるから子供等を養ふことが出來るに』
と悔ひければ母は
『アー、子供等が今此處に居るならば』
と涙を流しながら云へり、其時窓の後にて聽き居たるマリチクは
『其子供等は此處に居ります』
と叫びければ母は喜びて入口に走り出でたり、而して子供等は皆打ち連れて室の内に入れり
彼等は必要なる物を悉く購ふて前の如く樂しく住みけるが終に又再び金は盡き果てにけり、而して此時父母は再び如何にして生活すべき乎を相談せしが再び子供等を森林に伴れ行きて棄てんと决めたり
マリチクは又之を聽きければ夜の明くるや否や石を拾はんために河に行かんと思ひ戸口に至りて開かんとせしかども戸は固く鎖されてありき、之を動さんと色々すれど丈け低くして栓にとゞかざりしかば如何んともする能はざりき
マリチクは小石を拾ふことを得ざりし故麵包を取りて衣嚢の中に入れたり、彼は父母には伴れ行かるゝ時に

路に麺包の屑を落し置きてそれを傳ふて兄弟と共に歸へらんと考へたりき
父母は再び子供等を森に伴れ行けり、其時マリチクは麺包屑を再び路に落し置きたり、兄弟が泣き出せしかばマリチクは再び彼等を森林より連れ出すことを約したり、されど路に落し置きたる麺包屑は皆鳥が食ひ盡したるが故に此度は全く歸へるべき路を失ひぬ、それ故この子供等は森林の中に徨ひ廻りしが日の暮るゝまで路を見出し能はざりき、朝に至りてマリチクは一番早く起き上り樹にのぼり四方を見廻して一個の小屋を見付けしかば樹より下りて兄弟を起し共に其小屋に到れり
彼等は戸を叩きしに老婆あり戸口に出で來りて何用なるかと尋ねければ彼等は其森林の中に徨ひしことを話せり、これをきいて老婆は彼等を家に入らしめて云へり
『汝等がわしの家に來たことは氣の毒でならんよ、わしの夫は人喰で、もし汝等を見付けたら直に喰つて仕舞ふに違ひないから實に氣の毒でならんよ、おそこの寢臺の下にかくれよ、明朝逃してやるから』
この言をきいて子供等は大に恐れ寢臺の下に匍ひ込めり、そして彼等は間もなく誰か戸を叩き室に入り來るを聞きしかばマリチクは寢臺の下よりのぞき見しに年老ひたる人喰がテーブルに對ひて坐りながら老婆に
『酒を與れ』と云ひければ老婆は之に酒を飲ましめたり、人喰は酒を飲み、そして鼻にて香を嗅ぎ始めたり
『人くさい、ドーモ、人くさい、汝の處に誰か隱れて居るな』
といへば老婆は誰も居らぬと答へたれど人喰は嗅ぎつゝ段々と近より來り寢臺の下を手以て戯しく探しマリチクの足を捉へ
『こゝに居つた』

と叫びつゝ彼等を捕へて大に悦び足をつかんで悉く彼等を殺さんとせり、されど老婆は

『マー御覽、大層瘠せて見苦しいじやありませんか、今少し養つてやるなら、脂づいて旨くなりませう』

と說き勸めしかば人喰は之に從へてこの子供を養ひ已れの娘等と共に眠らしめたり

人喰に七人の娘ありけるが矢張り此七人の兄弟の如く同じく小さくして七人共に一ッの寢臺に眠り居たりき此娘等は各々金の帽子を被ぶりてありしかばマリチクは之を見付け人喰が其妻と共に去りしを待て極く靜に其娘等の帽子と彼等七人の兄弟の帽子とを取り換へて被ぶれり

人喰は終夜酒を飲んで大に醉ひしかば再び童兒等を喰はんと欲し起つて彼等が娘等と共に眠り居たりし部屋に至り金の帽子に觸りて

『オット、酒の醉で、も少しのことで已れの娘を殺すとこであつた』

と云ひつゝ童兒等の處を去りて已れの娘の寢床に至り其柔らかなる帽子に觸りて童兒等なりと思ひ悉く之を殺して眠りに就けり、於是マリチクはその兄弟を起して戶を開きて共に森林の中に逃げ去れり、

童兒等は晝も夜も徨ひ廻りたれど森林より出づる能はざりき

人喰は翌朝目をさまし他處より來たりし子供等を殺さずして却て已れの娘等を殺せしことを知り直ちに『七里の靴』を穿ち童兒等を探索せんとて森林に走り行けり、

『七里の靴』とは之を穿つものは誰でも一步に七里を步むことを得るものなり、

人喰は處々方々探し廻りたれど見出すこと能はざりければ子供等の隱れ居るとも知らず傍に至り息まんとて

腰打ちかけて眠れり
マリチクは入喰の眠りしを見て靜かに其足許に近づき入喰の衣嚢より金一握を取り出して之を兄弟に與へ、竊に入喰の靴を脱がせて自ら其『七里の靴』を穿ち兄弟に固く手を取りて彼の後につき來たる樣に命じて走り出だせしに甚だ速かにして森林を出づるや否や直ぐ家に歸へれり
彼等は家に歸へりて父母に金を與へ共に富有の身となりしかば父母も最早彼等を棄てんとはせざる樣になれり

笛竹

秋葉女史

彌生の春のゆふまぐれ梢の若葉くろみゆき遠山寺のかねのねは森にひゞきてきこゆなりいざやこれより書よまんとかすけきともし火かゝげて文机にうちむかひてまだいくほどもあらぬに遙にさそふ松風につれてゆかしきねの聞ゆるに、たが心すさびにやとみゝをかたむくるにこたびはいと近くきこゆるにぞそゞろになつかしう覺ゆるものからやをらとぼそおしひらけば今しもかなたの山の端にいでし十六夜の月影のいとさやけくすめるにぞさてはかの人もこの光りを愛でゝにやといよ〳〵たゝずみてあるに其音もいと淸らけく遂に一曲をおへにける、あゝゆかしの笛竹の音やとおもふにつけても其かみに無官の君の青葉の笛をめで給ひしそのやさしき心の内のいみじうなつかしうて思ひはいつしか須磨のうらけのたゝかひに及びければありしむかしの忍ばれておもはず落すひとしづくにふと心つきて再び文机にうちむかへばあたり靜かにおさまりて松の木立を吹きはろふ夜風の音のみいとたかし

四民の論（農）　千代女

農は其業賤しといへども、上御一人より、下諸萬人の食を作り出す故に、次序、工商の上にあり。其妻たり、女たるものは、養蠶、織機の事は、云ふも更なり、晝は、野前の餉を持運び、夜は、月下に衣を擣ち、粗飯粗服し、耕作の業、盛んなる時は、夫と共に、朝の風に梳り、夕の雨に浴し、霧を犯し、霜を踏みつゝ、粒々の辛苦を手つたふなれば、丈夫も及はず、疲勞すれども、殊に打開きたる曠野、山水の絶景を眺望し、氣樂なる世渡りなれば、心も悠に、自ら長壽を保つべし。農家には、先祖やんごとなき人の裔、代々連綿として、筋目正しきも多し。質素を本とし、奢侈なく、如法の風俗、うつり變らぬやうに、子孫遠長の相續を、心とすべし。

小説

あの兒（下）

池田再來

午後より我はこの兒を伴ふてきのふ見し堤の上を逍遥しつゝ左には北上の川を下る白帆あげたる船を見送り右にはこの村を半ば取圍みし樹林の間より湖を眺め折〳〵は半空に雲雀の勇ましき囀りを聞き而して顧みてかの兒を見れば小歌うたふて背なる孩子を愛やしつゝ草花を摘んで居る、

我はこの時問をかけんとしたがそれに先立ち背なる孩子を覗いて、可愛ゆらしき子であると賞めた、この言葉は養治を動かしたりや、かれの顔には喜びの色溢れて見ゆる、そなたも矢張りこの子をば悪くゝは思はぬか大層仲好しと見ゆるのと我は打笑んで話しかくる、かれは屈んだまゝに立も上がらで手なる草花の莖を指と指との間に轉ぜしめつゝニヤリ〳〵と打笑んだ、

お前を養ふて呉るゝ今の父親の子ならば子護をさせられても仕方ないとあきらめることもあろうが、これは傭人の子ではないか、お前はあの家へ貰はれた人だしこの子の親はあの家へしばらく奉公に來て居るものではないか、何んだか知らぬが時々はお前却てあれ等の

小言を食ふやうだと私には聞こえて不審に思ふて居るが、しかしお前には何んとも感じないのか、何んとも思ひはしないのかと我は問を試みたが養治更に返事はせでさつきの通りニヤリと打笑みそのまゝ頭を下げた我も枯草、若草雜りの堤の床の上に尻をついて足を差のべ河原に臨んで養治と相幷んだそしてしばらくは今發したる問を自ら解して自ら答へた、この兒が我見廉目つけし通り孩子を護ることを敢て厭はぬものとすれば、はて何物か然らしむるのであろう、

この兒の心は丁度この春の野のごとくに平和をもつて充たされてあつて、世の人の所謂差別をばこと〲く打拂つて寧ろ宿したることのなくて、今その指の先に弄ぶ草花の芳しき香の如きものに不斷取まかれて、そよりと送り來るこの風の如く軟かな情が物に對して自ら湧出づるのであろうか、然れば誰の子とてか愛らしからざらん、この兒もしかくの如きものならば我より發したる今の問が愧かしくもなる、謝まろうとも思ふ、

或はまたこの兒もとより人の子を護りて汚濁を忍ぶを快よしとはせしにあらずも屢ゝの呵責に進まぬ心を勵まして日を重ぬる間、習慣の毛衣につゝまれて奴隷に甘んずるやうに化し去り、逆つて恐喝を受けんよりは順つて無事を樂むものにてあるか、

或はまたこの兒にはあるらしくも見ゆる物の感じといふ側には天性の怠惰であつて、恐ろしとも感ぜず苦しとも感ぜず、うれしとも感ぜず、氣の毒とも感ぜざるものにてあるか、よしやまた感じても忽ちにして忘るゝそれ等の類であるか、

我は如何んとも遂には判じかねてこの兒、元來賢か愚かと思切つて問をかけた「お前はその子を誰のであると思ふぞ」

かれは漸く口を開いて我には覺惡くき畧號か綽名を呼

び而してこの子はその遺れ片身なる孤兒である由を説いた、問ひ返し／＼やうやくこの趣を傳へ得たのである養治今正さに談話の緒を得て進んでこの子の來歴をポツリ／＼と述べた、我れの口にてそれを復寫すれば彼は振り向いて村の端を指さしかしこの高き木と低き木との間に一軒の草の舍が去年の暮迄は建つてあつて、朝ぼらけこゝの堤の上より望めば軒から漏るゝ烟はあの梢よりもなほはるか高く立登りて而して空に散ずるが常のことで、私もこゝの堤に遊びに來るのが常のことで、朝毎には必ずあの家の主人にこの所で相會ふことも常のことで御座りました、當時 私は貰はれて來たばかり誰は何なるやをも更に了解らず、近隣に小供の無きにはあらねどそれ等と共遊びすることと更に而白くもなければ寧ろたゞ一人で人の居らぬ所に獨り遊びするが爭ふ世話もなくて樂しいことであらうと私は確かに思つたものと見えてこゝの堤に上りて前を向きては川を眺め後をむきては森をながめ、珍らしい草や木の芽を搜がして根から掘つて家の庭の一隅に移し植ゆることなどを日毎の慰としてありました、その時分に私の遊んで居るのを見てハラ／＼と涙をこぼしてよくひとり遊びして居るふさ優しい言葉をその人はかけてくれました家の老爺樣などは穀潰し／＼と言つて少しの過ちも大きな聲で叱り付けて私にあの家を嫌らはせるやうにばかり仕向けてくれました私は丁寧にしてくれる人が懷かしいと思ひます、おれのところへ遊びに來よと言つてくれる人はその人ばかりで遊びに行つても相手になつて話をきかせてくれるのもその人ばかりで御座りました、そうして居るうちにある日、その毎日のやうに遊びに行つて私の父親のやうに思つて居た人が病氣にかゝりて長くも寢ずに死んで仕舞ひました、私が尋ねて行つて枕元に座つたとき私を見て、お前にも二度とは會はれないと言つて涙をこぼし

たときの顔が今も眼にうつります、その人が死んで仕舞つたればこの子の母は外の家へ行くからこの子が邪魔だ誰か貰ふて呉れる人があるまいかと言つたのを家の主人が聞いて、それではこの間うちの傭人の子が亡くなつたばかりで乳には不自由が無いから貰受けやうと承知してこの子は家のものとなりました、そして傭人のあの女を乳母見たやうにしてあるので御座ります、私はこの子もよく私の身と似たやうなものだと思ふと、可愛いそうでなりませぬ、私は家の人達が揃つてこの子を粗末にするから私ばかりも弟だと思つて可愛がつて居ります、

この時背なる孩子は目覺めて泣くこと頻りなれば乳を吸はせて來んとて養治は田畝の方へ行き我はなほ長堤を獨歩した、而してこの北上の流れのある岸なる一村が如何にして聞かれ而して今は如何なる心をもつて充たされつゝあるや、かの家とかの兒とに就て連々思及ぼし一篇の詩を得たりしが耳元より飛立ちし雲雀の叫びに驚かされて遂にその言をば忘れて仕舞つた、

翌る日その村を辭してより今の日に至るまで殆ど三年

「彼の兒は」



石燈籠

談叢

狐のレイナード（四）

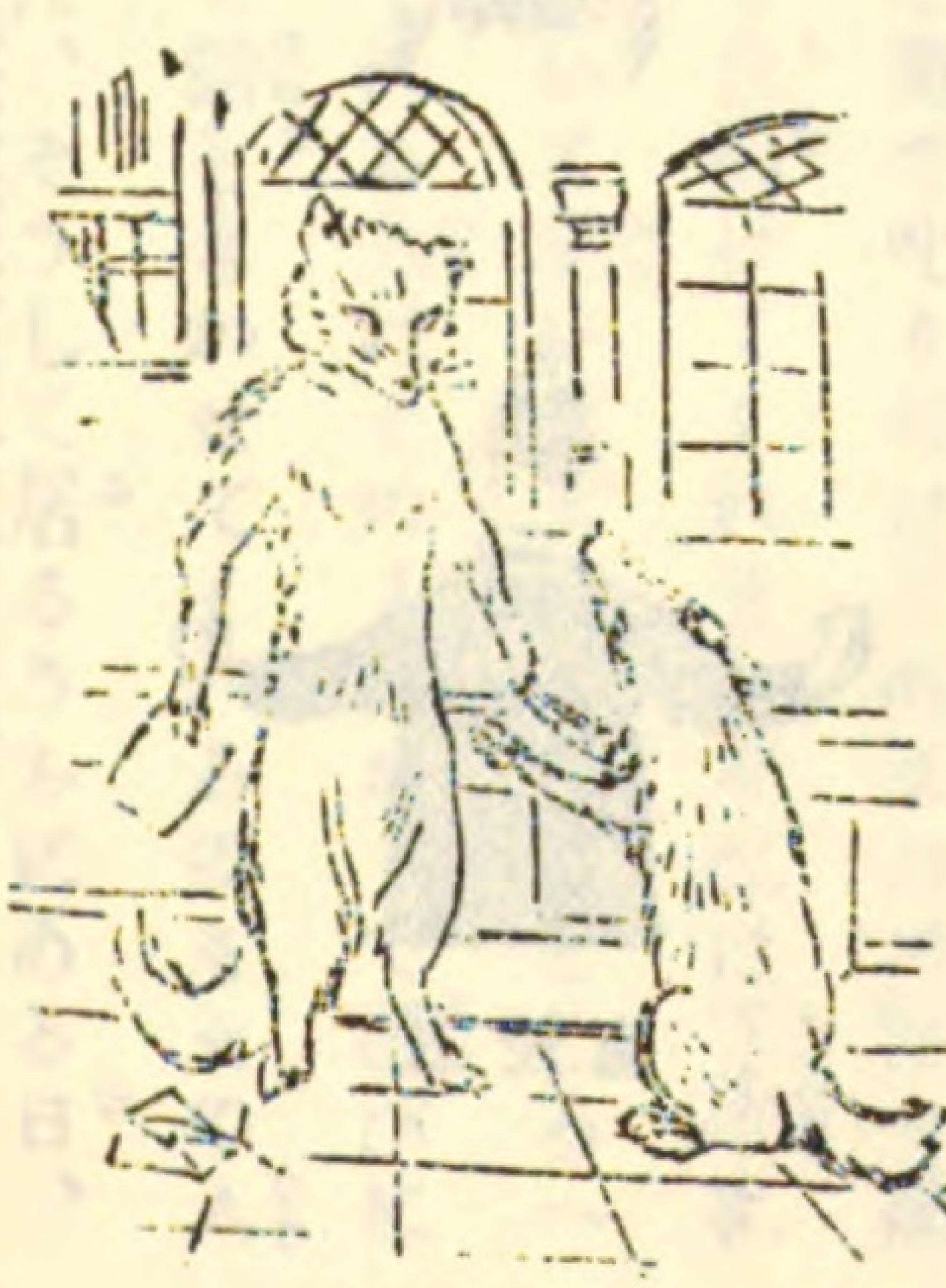
勝間禪夢

レイナードが重ね〳〵の犯罪に、獸王の獅子は烈火の

如く成つて憤り
己れ暴逆無道の大悪黨、縊首の極刑に處するとも飽き足らない悪つくき畜生！レイ奴己ぬ何うして呉れう。
と雷の様な聲張上げ家内も震動える許に叫びました、そして貉のグリムバートを呼び寄せ、嚴かな命令を下して、
グリムバート、貴様とレイ奴とは叔父甥（前回に從兄弟としたは間違で有つた）の仲であるから、貴様が行つたらよも出席を拒むことは有るまい、これから貴様は直ぐに行つて何うしてなりとレイ奴を連れて來い、首尾よく此の命令を遂ぐれば善し、仕遂げぬ時は汝も命は無いぞ！。



と言ひました、それ故グリムバートは狐の砦城に急いで參りました處、レイナードは妻や兒供を相手に平氣な顔で父親ぶつて何か頻に話して居ましたから驚き呆れて
レイナードの叔父さん、さあ直ぐ私と一緒に御出でなさい、叔父といつても天下の罪人容赦は無い、さあきり〳〵と御立ちなさい、愚圖々々して居ると獸王が非常な軍勢で押寄せますぞ。
と言つた、狐は蔑如む様な顔つきで貉をはたと睨みながら



これグリム、貴様は何を言ふのだ、人の家に挨拶も爲ないで默つて上り込む様な無禮があるか、貴様も學校で禮儀作法といふ事位は教つてるだら

う、それに何だ、怪からん、叔父に向つて聞きたくもねへ罪人呼ばわり、一躰斯様使者に來る奴が有るものか、白痴奴、獅子も獅子だ根も葉も無い人の噂語を取上げて、正直な私を罰しやうなぞと、思へば悲けない仕様だ、だが無實の罪は飽まで辨解して早く明るい身に成らなきやあ不可ん、グリム、ではさあ行かう。



と言つて立ち上がつた、そこで遂々レイナードはグリムパートに連れられ、獅子の法廷さして參りましたが、道々も如何して罪を誤魔化さう、如何して死刑を免れやうなぞと種々考へに苦む様子でした、それからグリムパートを眺めて分疏じみた懺悔じみた、事を誠しやかに饒舌立てました。

グリムさん、お前は私を疑つてるだらうが、私は熊や猫を意地目た覺えは毛頭無いのです、私が朋友の好誼を思つて助けやうとした許に、却てそれが仇と成つて斯様詰らぬことを言はれ、とんだ、あゝ止しやあ善かつた……殘念口惜しい！

此時狐は兩手に顔を押さへ、涙も持たぬ眼を態とらしく擦すつた。



私も若い時は隨分無分別な事を仕出來して、今から思へば慚愧に堪えない様なことも有つた、それも罪といへば罪だが別段惡意で爲た譯で無いから、まあ一通聽いて御呉れ、私が御寺に居た時分、狼のイスグリムが私を尋ねて來て、和尚さんに使はれて善根を積みたいといふか

ら、その實旨い物食べたくて來た根生は知つてたけれど、仲間の事だから兎も角これを和尚さんに話して見た處、早速承知して寺男に使つて遣らうと仰有つた、イスグリムも大層喜んで勤めて居たが、漸々慾が出て來て今度は鐘撞男になりたいといふのさ、私は餘り生意氣だと思つたから、直ぐ鐘樓に連れてつて、さあ幾何でも御撞きと言ひながら、彼奴の前足を釣鐘の繩に括り付けて遣つた、すると彼奴足が痛むと見えて繩を引張り出した、鐘は鳴り續ける、彼奴は泣き出す、坊さんも小僧さんも皆な喫驚して飛で來る、それ狼の仕置だつていひながら打つたり蹴たりするのさ、



私も見兼ねたから仲へ這入つて漸々和解をして遣つて、寺の勤は辛らからうから止せつて言つたら、何に御寺に居るのは厭ぢやないが、此の鐘つき許りやあ己に出來ねへから御免だ、頭を剃つて本統の坊さんに成りたいつて洒落臭さいことを拔かしやがるんだ、私も止せば善いに彼奴を忌々しいと思つたので、よしきた剃つて遣らうといつて厨堂から燒火箸を持つて來て、厭つていふ程彼奴の腦天へ押付たのさ、すると暑いのに痛いので堪まらないものだからヒーヒーつて呻り始めた、それが餘り騷々しいので和尚さんも大層腹を立て、遂々彼奴は一週間絶食の刑を命じなすつた、それから彼奴は私に泣きながら、食はず



に居られないから何卒逃がして呉れろつて賴むのさ、私も可哀相のことを爲たと思つて、私の樣に坊主に成るには容易の苦勞ぢや出來ないから、思ひ切つて外の稼業をしろつて懇々諭して裏口へ窃然逃がして遣つた、ところが其の事が顯れて宗則に反する仕業だつて私まで破門を食らはされて仕舞つた、そこで據處無く今の棲居に引籠つて、もう馬鹿な徒事はしまいと熟々前非を後悔し、それからといふ者は唯の虫一匹も意地目無いのさ、お前に此の通り悉皆打開けて白狀したからにやあ、どうぞ唯つた一人の此の叔父を憐と思つてね、私の證人と成つて後生だから辯護して御呉れ。



グリムパートは狐の話を聞いて少しく叔父の不幸を感じたから、路傍の生垣より手頃の枝を折り取り、それでレイナートの肩を柔かに三度叩いて同情を表しました、そして其の小枝に泥土をこて〴〵と塗り付け、レイナードに向つて斯樣言ひました。

叔父さん、貴下は此の枝に接吻なすつて、その御誓言に僞無いを示さなければ不可ません。

それ故レイナードは據處無く、グリムパートの目をおぞくも晦めて飴める樣な眞似をしました、その實唾を吐きつけて鳥渡濕らした許ですけれど、グリムパートは眞實誓言を顯はしたことゝ思ひ、



それで貴下の御心持も分りましたが、此後とも決

して悪い渡世を爲さらないで、日曜日は必ず御寺へ行つて說敎でも御聽きなさる樣になさい、そして盜賊の樣な詐欺じみたことはもう〳〵なさいますな。

と諫めて言へば、レイナードも承諾の由答へて、互に約束結び合ひ、再び連れ立ち歩を進めました。



軈て尼寺の横手を通らうとする時、そこに牡雞や牝雞が雛子相手に樂しく遊んでるのを、さも欲しさうに流涎地まで垂らして眷戀見詰めて居たレイナード、我慢が出來なく成つたと見え急に飛んで往つて肥え太つてる牝雞の一つに食ひ付いた。

此の有樣を見て居たグリムバートは餘りの事に呆れ返へり、彼程約束したその舌の根も乾かない内に、まだ懲りないで遣らかすのかと腹立たしく思つて、レイナードの後を追ひ掛け、その尻尾を口に喰はえて橋の架かつてる道の方へ引き摺つて行つて、

叔父さん、貴下はまあ何うなさつたんです、御氣は確かなんですか。

と咎めて言つた、レイナードはこれが爲め牝雞を放して仕舞つたから、引き摺られながらも幾度となく尼寺の方許口惜しさうに振向いては、

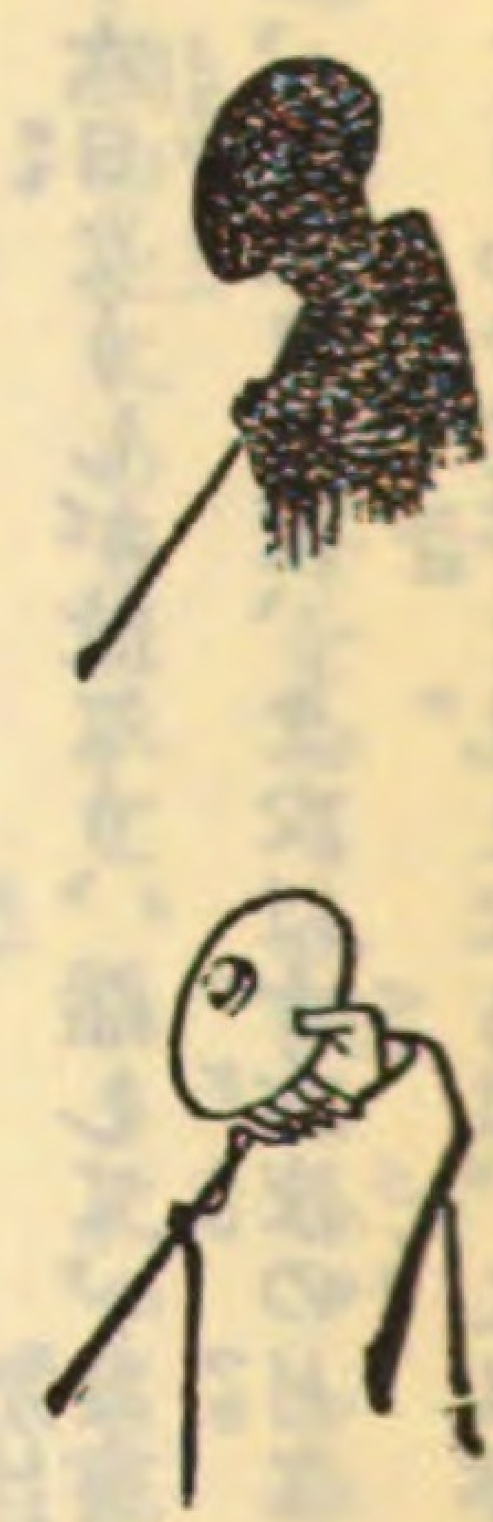
私は何もしやあしない、何も爲やあしない。

と言つて居ましたが、遠くなつて雞の影も寺の屋根も見えなくなつた時、もう駄目だと諦めて急に白々しい顏を作つて斯樣言ひました。

グリムさん、お前はつまら無い世話を燒く人だ、今のはこういふ譯だから聞いて御呉れ、あの尼寺の雞は、私を非常に怨んでるのさ……何故つて私がまだ悪さをした時分、彼處の雛子を食つた事が

あるんだ、それを何時までも親雞が嘆いてる樣子さ、丁度今その親雞が居たから前の罪を謝やうと思つて行つた處、私を恐れて逃げるから仕方が無くつて捕まへたんだよ、それをお前が他から入らざる御世話をした許に、何んにも談話を出來なくしちつだぢやないか、私は本統に殘念だよ、總て人いや獸といふものは惡いと思つたら謝びる樣で無くつちやあ不可ないよ、お前もちつと以後私の心を眞似ると善い。

グリムパートはレイナードの托言上手の巧辯に、啞然として口を襟ぐんで仕舞い、何も言ふ事が出來ませんでした、それから始終無言で二人は步いて居たが、獅子の宮殿が遙かに見えるやうになると、レイナードは肩を怒らして見たり、手を振つて見たり、意氣揚々とした風を態と作つた、併し內心は戰々震へて居ました。


接隣

群書解題

十六夜日記（附夜の鶴）

欲東老人

今を去ること、およそ六百年の昔、弘安年間のことなりけり、衣ぬふ播磨の國、細川の庄といへるを領せし人に爲家とならんいへるがありけり、其所領ことごとく、これを正室の出、爲相といふに讓り與へて、其身は歸らぬ人となりけり、されば即ち其日より、この爲相こそ、二代の主として、其地を領すべかりしなり、さるを、庶腹の男子に爲氏といへるもの、新主爲相の、

年はまだ幼なきを奇貨として、ほしいまゝに暴威をふるきひ、狎領なさんと巧みたりしを、種々様々と道理もて、説くとても固より入るべきならず、遂ひにその野心を成就して、おのれ二代の主とはなりけり。爲相の母《阿佛尼》のいたくもこれを、無念におもひ、如何にもして、これを取りかへし、我が子爲相をして跡をつがしめ、一つはなき人の心をつぎ、一つは我が身も亦、老後の幸ちを亨けんものをと、雄々しくも、國を出てゝ唯ひとり、はる／＼の道を、相州鎌倉に下りてこれを訴へ、遂ひに望を達したり、其折りの道すがら、目に見、耳にきくところ、これを一々にあまさず漏さず、悲しきにつれ、おかしきにつれ、書きつらねたる道の記こそ、この書、十六夜日記なり。

斯る心に大事ある時、誰かよく悠々筆をとりて文をかなす、堂々たる男子にありても、もしこれあれば多とすべし、況んや蒲柳軟弱なる婦人の身にして、然かも千石の患あるもの、物うき旅の窓下に於て、悠々斯くの如くなし得し、實に以て多とすべし、たとひ、其筆のまはらざるも、其文の更に綾なきも、實に以て多とすべし、去るをこの如く筆は思ひと共に馳せ、文は思ひを飾りて綾ある、豈に稱せずして可ならんや、豈たたへずして可ならんや。

細川幽齋、松永貞德の如き人々、此日記をほめて、今の世に、旅の日記かゝん人は、この十六夜の日記をすてゝ、何をか外に手本とすべきと、いひなせること誠に然り、ことわり至極と我れはおもふ、實に其文章の妙なること、固よりいふまでもなきことなり。

さて、其十六夜と名付けし所以は、其出立の日の、神無月十六日なりしが故なり、然して、其書中數多き歌の中に、十六日の夜、または十六夜の月などゝいふことの、とりわけて多く見えたるは、これ亦一つにそが故なり。

とゞめおく舊き枕の塵をだに
　我立さらば誰かはらはん。
迷はまじ敎へさりせば濱千鳥
　ひとかたならぬ跡をそれとも。
はる〴〵と行先遠く慕はれて
　いかにそなたの空を眺めん。
つく〴〵と空な詠めそ戀しくば
　道遠くとも早やかへりこん。
あだにのみ涙はかけじ旅ごろも
　心のゆきて立ちかへるほど。
君をこそ朝日とたのめ故鄕に
　殘る撫子花霜にこがすな。
おもひおく心とゞめよ故さとの
　霜にもかれじ大和撫子花

などの數首、いづれも日記中にあるものにして、ともにこれ、著者阿佛尼が吟咏なり、咏じ去り咏じ來れば、各一段の趣味、或は古の歌仙をしのぐ、決してなきにあらざるなり、殊におはりの二首、その撫子花を詠せるものゝ如きは、子をおもふ親の心、おのづから文字の上、詞の上にあらはれて、いうにやさしきところ、いうにあわれなるところ、詠じ了りて瞑目すれば、其子が上をおもふ心を杖として獨り鎌倉の遠きに下る、阿佛尼が面影、ありありとして枕邊にせまる。

もしそれ、其が文章に至りては、初めにもいひしが如く、實に記行文の好模範、各々其妙は讀んで知るべし、繁をいとふてこゝには引かず。

註釋の書、十六夜日記殘月抄といふがあり。

また、この十六夜日記の外に、夜の鶴といふ書あり、ともに阿佛尼が筆になる、それとなくおもひ浮ぶことゞもを、書きつくねて其女に贈りたるもの、又これ一の名文なり、殊にその、縱橫に言を盡くして、歌道の奧儀を論ぜるものなど、實に其學識の高きをあらは

す、却つて十六夜日記にもまして、阿佛其人を見るに便あり。

十六夜日記を讀みたる人は、又夜の鶴をもよめ。



兎

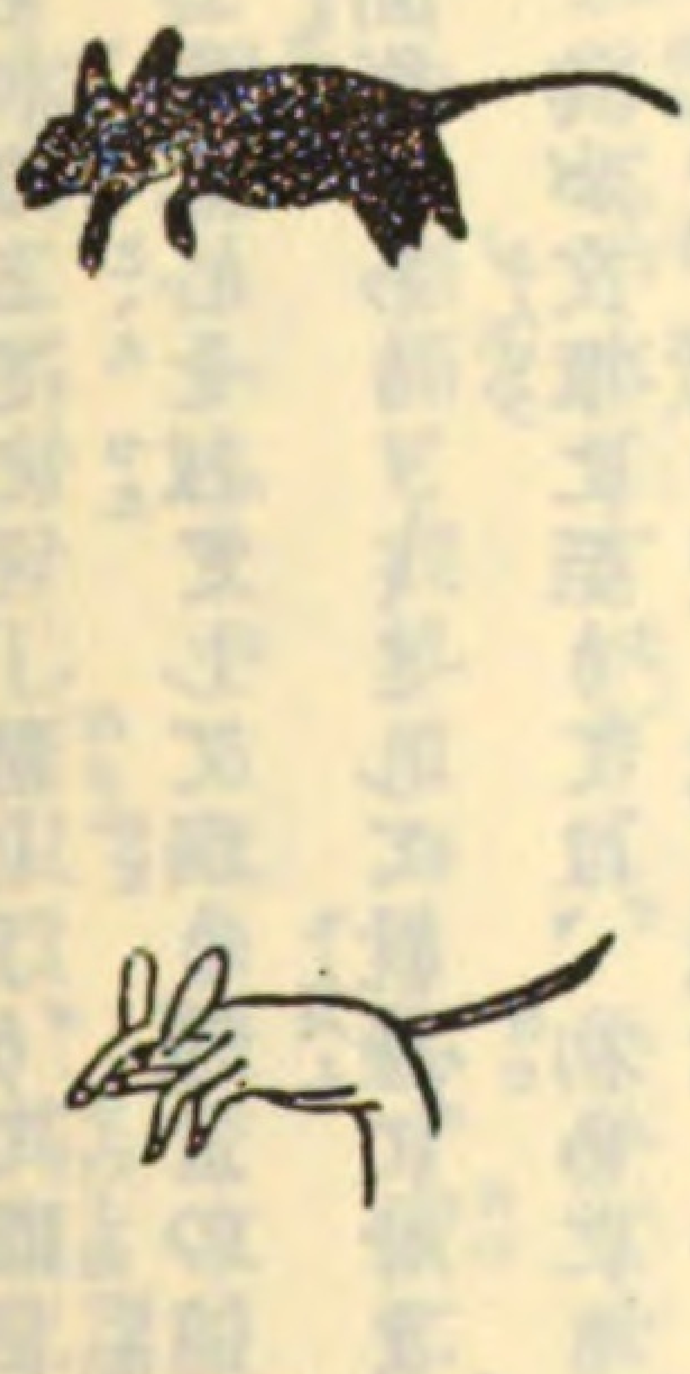
近着紹介

小説八家選　　博文館發行

文藝倶樂部臨時增刊、大抵舊作に屬す、卷中ツルゲーネフ作二葉亭四迷譯の『夢がたり』は實に壓卷、露伴の『當世外道面』は面白く、二十三階堂の『開運札』小金井喜美子の『心づくし』家庭の讀物とするに足る、美妙の『惡の窖』は國民の友の『閻魔地獄』に自から摸倣したる平凡の作、紅葉の『戀のぬけがら』は清淨なる家庭に入るべからず

家庭要訓　　神田區新石町　同文館發行

本書は下田歌子の著述に係り主婦のつとめより老人、小兒、親戚、朋友、婢僕、病人等の取扱ひより金錢、飲食、住居、禮式、書信、音物に關する注意を述べ各其要を得主婦の讀物となすべし定價二十錢



鼠

英文一斑

改正條約も愈明後年から實施になりますれば、入兵衛

の隣にジヨセフが家を構へ、三吉の妻にはジヤンヌがなると云ふ樣な、珍事も起りましやうし、玆では英語で團欒たる家族の情話に樂しむかと思へば、其隣りでは獨乙語の井戸端會議など云ふ樣な珍事も、强ち起らぬとは限られません。左樣なりますれば、數種の外國語位は心得て置かねば、必ず差支がないとは云へませんが、玆に一ツ便利なものは英吉利の國語であります。何故と云ふに、何ふ云ふ譯か、此英語と云ふ言葉は、世界語とも稱へまして、世界何處の果てに至りましても、殆んど通用しない所はありません。例へば橫濱や、神戸などに住で居る商賈人なども、其取引に用ゆる言葉は、佛國人であらうが、獨乙人であらうが、若しくは以太利人であらうが、殆んど凡て英語を用ゐて居るのであります。又例へば日本から英國に至りて、更に亞米利加を通りて日本に歸ると致しましても、上海に行ても香港に着きましても、其から新嘉坡に參りても、印度や錫蘭を通り、亞丁を經て英國に至るに、殆んど英語の通用しない所はない、其より大西洋を渡りて、米國を經過して、布哇を過ぎり、橫濱に歸り着きます迄、英語で不便を感ずる所は、殆んどありません。夫れで他の國語に就ては、暫く云はず、英語丈でも、自由に讀み、自由に語り、自由に書くことが出來ますれば、普通の外國人との交際には夫れ程の不便を感ずることはありますまい。夫れで私は、佛蘭西語、獨乙語、以太利語等のことは後廻しとして追々述べることに致しまして、最初英語のことから御話を致さうと考へます。英語の内でも、文典とか其他の小六ヶ敷規則等でなく、極々普通なる日用文のことから始めて、日常極めて必要なる事柄を、一通り述べて置かうと思ひます。

先づ日用の文書は、之を四種に別つ事が出來ます。第一は Familiar Letter（日用尺牘文）と申しまして、是はつまり友誼を暖め、若しくは日常の用を辨ずるの手紙

にて、恰も談話するが如く、極々平易なる文章を用ゐて書くを善しと致します。尤も此手紙には別に是と云ふ確定した書式は、ないのであります。第二はOfficial Letter（公用文書）と申しまして、是は書式も畧一定し、談話等よりも、多少嚴格なる文脉を用ゐます。第三はBusiness Letter（商業用文）でありまして、是は用を辨ずるを主眼の目的と致し、文章には可成、無用の修飾をなさず、併し必要なることは、決して取り落さない樣に、疎畧に流れない樣に、簡明に實着に述ぶる特別の文書であります。第四はNoteと申します。是には別に定まりたる文脉はなく、端書などに書くが如き、極めて簡單なる一種の文書であります。Noteの内でも、Invitation Note（案内狀）の如き、頗る正格なる文脉もありますが、封筒をも用ゐざる、極めて疎畧なるものもあります。

偖て是から、極簡單なる實例を擧げて、御話を致さうと存じます。例へば貴女が、御朋友の英國人ジョンソンさんに御用がありますか、又は御招きをなさりたい時分に、『明日何時もの如く散歩をする時、立寄りて呉れよ』と云ふことを、日本語の讀めないジョンソン氏に、御通知なさるには、如何なされば、宜しいでしやう？ 別に六ケ敷とはありません。端書に左の如く御認めになりて、之を郵便函に御投入になれば、宜いのであります。

My dear Mr. Johnson,

May I ask of You a favour to call upon me to-morrow when you take your usual walk and oblige,

Yours sincerely,

March 10th.' 97.　　Takenobu Hanako.

拜啓仕候明日平常御散歩の節拙宅へ御立之儀被願可候や御伺申上候

明治三十年三月十日　竹信花子

ジョンソン樣　机下

茲で一寸申して置きますが、英文書簡には、………申間敷哉……と云ふ樣な意は、餘り表記せざるを禮と致します。何故と云ふに、例へば May I ask………と云へば、甚だ意味が穩でありますけれども、May I not ask………と申しますと、頗る意味が強くなりまして、先方を強ゆる樣に聞えて、願われまいか、願われそうな者だなど云ふ風になります、是等は、書簡を書く時には、一寸心得て置て善ひとであります。

さて此端書を御出しになりまして、先方が夫れで差支がないと云ふとならば、大抵直ぐに次の樣な返事が來るで御座いましやう。

My dear Miss Takenobu Hanako,

most willingly, I Shall be at your service,

Yours hastily,

March 10th.' 97 Cameron Johnsons.

拜復 喜で貴命に從ひ參趨可仕候早々

明治三十年三月十日 カメロン、ジョンソン

竹信花子樣

紙面に限りがありますから、本號にては先づ是迄と致し、次號より段々と委敷御話を致します。

家政

庖厨雜俎（其四）

恕哉

(10)竹筍の砂糖漬

追ひ〳〵竹筍の時季となる筍は種々に調理し得らるゝものにて煮付け、筍飯、等は能く人の知る處なるが貯へ法としては鹽漬、梅酢漬等になして時季外に出だすも鳥渡珍らしきものなり、而してこれを砂糖漬と爲すは一層珍らしくしてその味ひも亦鹽漬杯の比にあらず

その法は先づ竹筍をよく湯煮て水一升に灰一合を混和したる汁にその筍を一夜間浸たし置き後ち取り出し水氣の成る丈け去りたるを待ちて砂糖漬となすべし、

(11)水の良否の鑑別

追ひ〳〵温氣に向へば第一注意すべきものは飲料水なりとす日常の飲料水は最も注意するにあらざれば衛生上恐るべき傳染病等の原因となるもの多し然し一々各戸の井水を分析して良否を鑑定するとは到底容易のとにあらざれば左に誰にても出來得る簡單の方法を述べんと欲す

先づ井水をコップに汲み取りこれに石鹸を「アルコール」に溶きて三四滴を加ふべしその水純潔良好なればその儘清くあれども若し混合物あるときは白き泡を生ずるものなり、又一法は矢張りコップの水に硼砂を少許入るれば悪水なれば濁りを生じ良水なれば清むものなりこれ等の方法にて大概の良否は鑑別し得らるべし

(12)甘薯の水飴

甘薯一貫目を薄く切り水に浸し置きて能くそのあくを抜き後ち釜に移し飯を炊く水加減にてよく煮へたる所へ一升の麥芽の末を混和し二三時間許り釜の蓋をなし置き而して後ちこれを布袋に入れて絞りその液汁を又釜に入れ煮つめ赤色を帶ぶる頃よく杓子にて攪拌せば次第に粘質強くなり遂に水飴となるその味ひ淡泊にして風味よろしきもの也

(13)蚊遣り香

この頃各家の庭園に咲ける椿の花の凋落を待ちてこれを拾ひ能く乾燥し置けば良き蚊遣り香として夏日の蚊患を防ぐことを得而してその香も餘り惡しきものにあらず或る地方にては専らこの椿の花の乾燥せるものを用ふるを見る試み玉へこれ又一種の廢物利用法なり

世の父母に告ぐ（齒の發生）

關田培凪

從來本邦人の習慣として視輕等閑に附する小兒齒牙衛生法に就き聊か世人の注意を乞はんとす人類は一生中二種の齒牙を發生す一を乳齒といひ一を成齒と云ふ乳齒成齒共に其發生の時期は人に依りて一定せざるか故古來より幾多の統計表あれども其作りたる人によりて各別々の時期を標示し到底各人の發生時を以て同一期限中に當箝むると能はず若し人ありて確然たる發生時期を示す者あらば余は其無妄なるを笑はざるを得ざるなり然りと雖も統計表及び吾人實際の上に對照すれば先づ第一着の發生即ち下顎中門齒の發生は五六ヶ月より十ヶ月位の間に於て發生する者其多きに居るか如し其より一二ヶ月を經て上顎中門齒二枚を發生し次に下顎側門齒二枚次に上顎側門齒の二枚を發生す尤も兒童に依りては上顎側門齒却て下顎側門齒に先て發生するとあり次に第一臼齒次に犬齒次に第二臼齒の發生を見る此三種の齒牙は上下左右一定せず下顎の上顎に先づあり或は後るゝあり或は全時に發生するあり大凡年齡二才半位を以て全齒完成するを見る上下各十枚合せて二十枚之れ乳齒の全數なりとす

乳齒發生時に於ては身體健全なる兒童にして被蓋組織の吸收齒牙の發生と平衡する時は少も其影響を被むるとなく知らずして經過し或は影響を受くるとあるも實に僅微にして敢て意に介するに足らずと雖も相平均なる小兒及び組織の吸收齒牙の發生と相平均せざる時にありては其影響を被むること甚しく所謂乳齒發生困難症なるものを發し延て全身症を續發し大に苦腦を感せしめ甚しきに至りては終に嬰兒をして不幸死に至らしむとるあり世の父母たる者尤も注意戒心すべきの時期なりとす

小兒は何れも酸味甘味の飲食物を嗜好するを常とす是

れ齒牙に有害なるものにして殊に乳齒は成齒に比すれば其造搆軟弱なるを以て其害毒を被むると著しきものなり然りと雖も齒牙に有害なるの故を以て小兒に右等の飲食物を禁止するは到底言ふべくして行はるべからざるの說にして余も亦其施與を是認するものなり嗚呼夫れ斯の如し然らば如何にして小兒の齒牙の健全を謀るべきか是を兒童に求むるも寸効なし唯賴む所は父母殊に母親にあるのみ從來母親の兒童に對する其愛するの餘りよりして日常濫與の弊あるを免れず可成的時間を定めて與ふるを養育法の正を得たるものとす慈母却て子を誤るとは千古の金言宜しく服膺して可なるべきか

小兒には常に齒牙を清潔にするとを敎へ自から齒刷子を使用し得るの年令に達すれば毎朝洗面と共に齒刷子を使用せしめ未だ幼稚なる兒童には母親手づから齒刷子又は布片を以て拭掃し遣るべし或は中には其手數面倒なるを口實とし等閑に附するものもあるべしと雖ども是れ父母たるの盡すべき義務を缺きたるものと言はるゝも敢て辯解の辭を有せざるべし且幼稚の際より斯る良習慣を養成するときは其習ひ性となり年長するに從ひ好んで口腔を清潔にし不潔を厭ふに至るべし齒牙衞生の方法多々ありと雖ども尤も必要にして且行ひ易きは口腔清潔法の一法にありとす

夫れ小兒は前述の如く好んで甘酸味物を食し加ふるに掃除怠慢なるを以て早く齲齒の發生を見已に三四才にして齒痛に困苦するの兒童世間少からず豈一片の同情なくして可ならんや尤も齒牙の造構不完全にして病的抵抗力弱少なるか爲此結果を呈するもの夥多なりと雖も又父母の注意如何に因りて此苦度を減少せしめ得へきは余の信して疑はさる所なり

殊に父母の注意すへきは乳齒の齲齒にあり大人にありては齲齒ありて咀嚼の不十分なるを感せば可成柔軟に

して消化し易き食物を攝取するを以て害毒を全身に及ぼすと至て少なく且齒科醫に就き治療するとあるも自ら其不自由なると苦痛を厭ふの感念と全身に及ぼす影響の如何を知得するを以て大に治療し易しと雖も兒童にありては咀嚼の精粗食物消化に如何なる關係を有するかを知らす又諄々說諭するも敢て腦裡に浸潤するものにあらず手當り次第口腔に攝取し決して其質の硬柔を問はざるのみならず若し齲齒ありて咀嚼の際疼痛を發するか如きとあれは直に丸呑にするを常とす遂に胃腑を損害し胃弱症となり營養不良の爲身躰の發育を妨害し所謂病身となり將來爲すなきの身に陥るとあるも屢々實驗に乏しからず且齒科醫に治療を依賴するとあるも腐蝕深入して些少の刺戟も疼痛を感するの劇烈なるに至れは小兒は凡て大人に比すれは神經の感受性強し加ふるに忍耐力に乏しきを以て其手術實に困難に感するものなり齲齒は初期の中に治療充塡するの最上得策なるは動かすべからざるの原則にして殊に小兒にありては時々に腔を檢査し僅微なりとも齲齒の徵候を發見したる時は其疼痛の有無に關せず直ちに齒科醫の許に連れ行き治療を乞ふを上策とす左れは兒童と治療の際無益の疼痛を感せさるのみならず豫后又前者に比して善良なるは余が頭大の印も捺して保證する所なり

乳齒は前發生の順序に則り一定の年令に達すれは脫落して成齒と交換するものなり之を齠齔期といふ此時期に達すれば乳齒々根は自然的即ち生理的作用によりて全く吸收消滅して齒冠部のみ殘存するか故自然に動搖を來たし些少の刺戟により或は食事の際不知不識の間に脫落するとあり或は人爲を以て殊に拔去を要するとあると僅微の疼痛を兒童に感せしむるのみにして除去するとを得べし是造化の妙用にして實に奇なりと謂ふ可し然れども良好の結果を呈するは啻に健全無病なる齒牙のみに限るものにして一旦齲齒に罹り腐蝕進行し

て遂に齒髓の壞死するに至れば又此作用を呈するとなく齒根は依然として殘留し自然に脫落するが如き事は決して之れなきのみならず齠齔期に達すれば成齒は乳齒の存否如何に關せず發生するを以て乳齒は永久存留せしむべきものにあらず必ず拔去せざるべからざるものなれ共斯る齒牙は槪ね齒冠欠損し腐朽根部のみ齒構内に殘留するものなるを以て此際施術者は成可兒童に疼痛を感せしめざる樣思慮を運らし拔去すると雖も前記齒根の吸收したるものに比すれば幾分か多くの疼痛を兒童に感ぜしむるとあるべし是れ父母日常の注意如何に依り其結果斯る非常の差違を生ずるものなれば父母たる者宜しく戒心すべき事なりとす齒科醫の乳齒を治療するに當り已むを得ざるの外可成齒髓の生存に力を盡すは此旨趣に基けるものなり世人謂らく乳齒は一時用にして他日必ず丈夫なる成齒と交換するものなれば乳齒を治療充塡するは實に無益に屬するものなり成齒の發生するに及び若しも齲齒を生ずるとあらば其時こそは充分の注意をなすべきなりと平然として少しも留意するの考なし偶々兒童の齒痛を訴ふるとあれば菓子抔を與へて其意を慰籍するに至る兒童は菓子の喰ひたき儘止痛せりと云へば喜んで其言に從ふもの又無しとせず實に思はざるの甚しき者と云ふべく余輩寒心の至りに堪へざるなり

之より齠齔期に於ける父母の注意を論述せんに前述せるが如く成齒の發生又人に依りて一定の年齡なし然れども兒童六七才頃に至れば是れ已に乳成交換の時期に到達せるものなるを以て父母は常に兒童の口腔に注意し下顎なり上顎なり成齒の萌生して已に齦肉を破るを見ば直ちに齒科醫に就き乳齒の拔去を乞ふを宜しとす若しも此際成齒の發生したるも敢て顧慮せず其儘放置する時は成齒は乳齒の存在して自己適正の位置に發生するを妨害するが故止むを得ず避けて抵抗なき方向に

轉じ列の內外に發生し爲に齒列を亂し或は捻轉して發生し醜貌を呈すると少からず反齒下懸齒（下懸齒とは正則の咬合に反し下顎前齒の上顎前齒の外方に於て咬合するものにして俗に謂ふ杓子顏を呈するは此不正の結果なり）等は多くは先天性に屬すと雖又齲蝕期に於ける不注意より此る嫌忌すべき結果を呈すると敢て少からず尤も排列の不整を矯正するの術ありと雖も此術たる多くの日子を要し且施術中多少の不便を感ずるは到底免るべからざるものなれば其得失利害齲蝕期に於て注意するの優れるに如かざるなり

痲疹の流行（其豫防及治療法）

東京市中には天然痘の流行漸次消滅の傾向となりたれど、之に代りて痲疹大に流行し、小兒ある家は至る處に此患者に遭遇す、されば各家とも豫防を怠るべからず、

豫防するには其患者の家に近づけぬやうにするは勿論なるが、其病毒は空氣中に移行し、之に觸接すれば感染する恐あれば患者多き近所又は不潔の場所に出さぬやうにすべし、又傳染せし上は看護に心を用ゆべし、痲疹にて一命を殞すもの尠けれど、等閑に附する時は、偶々死に及び或は不測の大病と變ずることあり、最も注意すべし、痲疹の兆候は始め感冒の如く咳嗽を發し、噴嚏を發し、涙を流し、頭痛及呼吸困難、音聲嗄れ或は嘔吐を催ふし、小兒は搐搦を起す、顏面、頸部に發疹して直ちに全身に及び、疹形は暗赤色にして半月形を爲し又皮膚に水腫を生ず、熱度は三十八度より四十度を往來し最高熱は一日間或は二日間なり、此病に罹らば直ちに醫師の診察を乞ふは言ふまでもなく、成るべく患者をして寒冷に遇はしめぬやうにし、滋養ある流動物（雞卵、牛乳、粥汁等）を與へ、日光と空氣の流通よき室を撰ぶも日光に患者を直射すべから

ず、日々湯手拭を絞りて患者の皮膚を拭ふも妨なし、看病に油斷なければ二週間内に全治すべし、然れども患者の躰質により喉頭炎、氣管支炎、肺炎、眼炎又はヂフテリヤを併發することあり、兎に角看病の行屆き肝要なり、

一度之に罹りしものは再度の患なしと雖も小兒多き家などにては一人之に罹らば入院さすか、或は病室の出入を禁し他の小兒と全然隔離して其傳染を防ぐべし、

女子職業案内

毛糸の編物　附メリヤスのかゞり

此の毛糸編物は容易に覺え得らるゝと女子の技術に適するとを以て、可憐なる少女が家庭の慰樂として讀書の餘又は裁縫の傍これを試むるもの少からず、或は兄の爲に靴下を編み或は妹の爲に帽子を作るが如きは殊勝なる事といふべし、然れども慰樂として此技を覺えたる後は職業として營むを望むものあらん、又新に内職を撰擇し居る婦人も多かるべければ、此等の人のために之れが製造元（内職として出す商店）を紹介せん。

毛糸メリヤス及び木綿メリヤスの製造問屋は日本橋區葺屋町五番地の石井商店といふ、今同店に於て行ふ内職の種類方法を聽くに、年齡十二才以上にして市内に一人の保證人を有し多少此技に熟練せるものは直ちに同店より毛糸を申受け自家に於て之を編むを得、編物の種類は、山岡頭巾、花附帽子、大黑帽子、涎掛、肩掛、襟卷等ありて賃錢は頭巾及帽子にて一ダース（十二個）十錢より壹円五十錢、これを一日の所得に換算せば大抵八錢より三十五錢位に當るものとす、此の職業は奇麗にして趣味乾燥ならず又割合に根氣を要せざれば内職としては最も善良なるものと思考す、其他同店に於てはメリヤスを又た内職業者に供す、しは襯衣、

ズボン下、手袋、靴下等をかゝり付くるものにて、貫錢は前者に及ばざれど大抵一日七錢より二十五錢に至るといふ。

社交一斑

流行の栞

流行子

洋服

日本服なれば袷といふ時分なれば、洋服も運動着といふ所を紹介すべし、

〔モーニング〕 上衣を紺、黒の薄地極細綾か又は七子目及斜二本綾に好み、ヅボンを薄綾の黒地白勝の中立じま羅紗にせば高尚の嗜好なるが若し意氣なるを好まんか薄地霜ふりの擣子羅紗を上着としヅボンを前記の如くすべし(價前者二十三圓位後者十八九圓)

〔脊廣〕 地質は綾セルにして柄は霜ふりの浮擣子、色は利久鼠、淡茶、銀鼠、鐵、焦茶等最も流行の好位地を占む(價十七八圓)、これは澁い好なれど普通にせば上着を紺の薄綾メルトンにしてヅボンを淡茶、淡鼠、黒地の立縞綾羅紗又は薄綾おぼろ擣子などよからん(價十七八圓)外套は淡色の薄地綾羅紗にして價絹裏廿圓繻子裏十五圓丈は長からざるを可とす、

流行の形は例の如く寛濶なるを最可とし、前の形は襟あきを廣くし襟を

十分に掻き取り、後は襟巾を廣くしヅボンを太やかに(股太く裾細く)するもの頗る人意に適す但し脊廣の後の形は縫目なきもの中々多く見受らる、

合羽

春の雨、かゝりし袖のぬれつばめ風に梳るゝ柳の下、又は晴るゝ間なき五月雨に、花菖蒲の姿つくらふ空には合羽こそめでたけれ、今回白木屋が一種の新意匠を以て世に出せし合羽の地質は男子用にて薄地綾羅紗の霜ふりおぼろ擣子又はうき擣子として色合は鶯茶、鳶茶、焦茶、鐵藍鼠、淡利久等最も面白く形は襞なし帶なし頭巾なし(所謂イギリス形)にして裏は甲斐絹を屑すべりだけ用ゐるもの最も流行せりこれ一は比較的價格の廉なるにもよらん(價十四五圓)

同角袖は薄斜綾の銀鼠、黒、藍鼠、鐵、淡茶等の霜ふりにして裏は前記の如く甲斐絹のすべりを用ゆ、袖裏はつけるもありつけぬもあり(價十一圓)次は霜ふりの薄地綾のおぼろ擣子(價十二圓前後)次は綾セルの霜ふり(價十圓前後)

吾妻コート(婦人用) 婦人社會には吾妻コートは大流行にて芝居見にも花見にもこれなれば、これを着せざれば何となく片身の狹きを感ずるが如し、されば時候の温暖となるに從ひ之に應じたる品なかるべからず、これからは美觀あると同時に合羽の代用となるものは紺、黒、肉色、かべ鼠、鳩羽鼠は令閨向にして、紅かけ鼠、淡鼠等のおぼろ擣子は令孃向、裏は甲斐絹のすべりをつけ、梅、櫻結びの飾を用ゆ(價十圓前後)

セル及フランネル單衣

今や袷の時候にして單衣にはちと早けれど、新着せしセル及フランネルの品柄餘り佳良なるを以て豫め此流行を記し置くになん、

〔セル〕 男子用には黒地に白の小棒、藍鼠の微塵、焦茶の小棒、黒地の

微塵、淡茶の大名、紺黒地の十の字等、婦人用には鳩羽鼠のおぼろ大名、淡鼠の斜木賊、淡利久の立波、藍鼠、利久、鶯茶の小紋（令閨）お納戸の菖蒲、白の大棒、銀鼠のより棒、黒地は白の山形、白地に淺黄の珍棒縞、脊竹地に淡紫の亂立（令嬢）價一反六圓位、

〔フランチル〕價は英一反三圓七十五錢、四圓三十五錢、獨乙三圓六十錢、佛五圓五十錢、絹チル（英製）四圓五錢、新奇の柄は黒地のくづし、鼠の大名、萬筋、微塵、藍鼠、淡鼠、鍋茶、淡お納戸、淡柿等の珍立縞、かべ鼠の三筋、利久鼠の亂立、白地の木賊、白地の珍三筋、淺黄の霞棒縞、肉色地に珍松魚及瀧縞等、

古代つま形の櫛

年々新を求め奇を競ひ婦人の道具も進歩せるが、近頃は製作する材料よりも細工に工夫と意匠を凝せり、例せば近日京橋區尾張町松田白牡丹より發賣せる古代つま形の櫛は其形は政子形の肩を落したるまでにして、其一は材料は杉、其一は黄楊に過ぎざれど、蒔繪の美妙と彫刻の精巧とを精神とし、需用者も亦此點に重きを置けり、二品とも此季節よりの流行品となるべし、價廉ならず杉製は二圓五十錢以上黄楊製は三圓以上なりと聞く、

當世流行の髮

島田は品格のよいもの、花柳社會にも貴族社會にも流行す。銀杏返は大振ながら髷のひろがりたるものははやらず、ふつくりとして丸く大人しきを喜ぶ、これは元結のかけ工合にて根をしばるものを前にて切去らず髷の内にかけて引きしめる加減にて後根にて結べば左右の髷が相接して大人しく丸くなるなり、丸髷は巾厚くして兩端も中央も殆ど同巾にて兩端の角立つたもの花柳社會の流行にてこれは先頃大裏中御停止髷と稱してづらりと此風になつてから今も尚流行す、すゞめ形、歌舞伎形、七分の勢、出雲橋襟治にて重に販賣するゆゑ襟治形ともいふ、併し上品な社會にては其名の如く雲井形と稱するもの專ら流行す、いづれも髷形は大振を好み若手の令閨向には大一番人氣多し。總じて前髮は細く起りて太く深く根も高きゆゑ其間は僅に櫛一枚がやつとなり、髱もつまり、髷は昨年までつんのめしたやうに詰つて居たが、今では少しは緩んだ傾を生じ、意氣がる婦人は總髮にして前髮をせずして銀杏返を結ぶ風流行す、又昨年頃より「おしどり」と稱する島田の上に毛髢をかけたるものを見受くれど、所謂東京の流行とはなるまじ。

寄書百珍

次號より新に『寄書百珍』の一欄を設け、一問題につき汎く讀者諸君よりの寄書を煩し之を紙上に臚列して一與を添ふべし、百號（來る四月廿五日）に揭ぐる問題は

摸範的婦人

如何なる性質、如何なる品行、如何なる志操を有する婦人が諸君の理想に適するか、文は最も簡を尙ぶが故に二十四字詰二十行以下に

限り所謂端書文學こそ願しけれ、愛讀諸君幸に寄書の勞を吝まずんば、我社の幸甚のみならず世を益すること多かるべし、

問題は號を追ふて改むべし、

雜録

東京府下女學校一班（一）

女子語學校

女子語學校は築地新榮町にあり、始め佛英和女學校と稱す本校は昨春女子高等師範學校卒業生戸澤かず子を聘して顯著の改革を行ひし以來敎授幷に寄宿生監督等一切氏に一任し宗敎とは全然分離の形勢となり（自習室内には特に中央に疊敷き排べ坐して自習し得るの便を與へ）務めて外國風を避け舍内の規律外出の樣杯は女子高等師範學校に似たりされば外見宗敎然たる建築なるも内部は本邦特得の柔和順良の日本的なり

◎同校の組織幷に課程

同校は本邦中流社會以上の子女勉學に適せしめんため設けたる者にして高等小學卒業以上の者にして佛、英、獨の外國語學、交際、作法、家政等を學ばしむるにあり故に同校外國敎師は佛人一、英人三、獨人一ありて之を敎授す然れども傍ら本邦諸學科を學習し得べき便を設け爲に女子高等師範學校並に女子職業學校卒業生を聘し必習科として修身、和漢文、地理、歴史、數學、作法、家政、裁縫等を授け隨意科として挿花、茶の湯、彈琴、風琴、ピアノ、刺繡科等を設け何れも滿三年を以て一般學習し終らしむべき規定とす（但し琴は山田流吉小島瀧音代挿花、茶の湯は松月堂古流正統日本准總會頭好靜庵氏の傳授を受けしむ）戸澤かず子氏は明治二十四年の卒業生にして耐來福岡、群馬の師範

學校敎育に從事し得たる多年の經驗を以て本校一切を取締り同校事業日々改善に赴きつゝありと云ふ又昨冬特に裁縫の本邦女子に須要なるとを認め女子職業學校卒業生中特に敎授懇篤老練の聞えある女敎師を聘し尙ほ每土曜日には名士の順講ありと云ふ

◎同校の授業料並に寄宿料　各外國語のみ專習する者は金一圓五十錢本邦諸學科兼習の者は金二圓一人特個に敎授を乞ふ者は一回金五十錢隨意科は概して一科金五十錢寄宿料は日本料理總じて金三圓五十錢にして普通外國學校に比しては廉なり

◎同本校の躾方　(一)同校は長幼の序整然として先進者能く後進者を顧み且つ敎師は生徒と朝夕起臥を同じうして家庭的の觀あり(二)斯く學校內に寄宿して生徒の家事に疎からんことを憂ひ之が補足としては朝夕室の內外の掃除、衣服の洗濯、配膳、給仕(特に調理は現今時を得ざるためなさしめずと)等の一切之をなさしめ特に食事の際は敎師生徒と共に同じ食卓につき膳部に關する諸禮法は實地に敎授すと云ふ(三)同校外國敎師は元來宗敎的隱者なれば萬端極めて素朴を重せりこれ他の女學校と異れる所なり(四)外出取締り又極めて嚴しく保證人より照會無き限りは一切外出を許可せず兼て又健康保持上構內に廣濶なる庭園を設け朝夕此處に十分の運動遊戲をなさしめ又天候快爽の好時節を圖り敎師監督の許に郊外運動を爲さしむ

○小兒○

はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味掛きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亜燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したる

スコット乳菓

が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に虚弱なる婦人

は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○

は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を願すなり彼の有名なる肝油の精と次亜燐酸の調合物なる

スコット乳菓

は能く咳嗽及風邪を去り肺臓を強くして活力を與ふることも實に驚くべし●〃●此の乳菓の洪大なる滋養分が**嬰兒、小兒**及虚弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を増し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の説明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈上



左の大取次所の外各藥舗にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝　境町	鳥居徳兵衛
仝　太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝　室町	資生堂
仝　本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝　道修町二丁目	武田長兵衛
仝　道修町三丁目	田邊五兵衛
仝　道修町二丁目	田畑利兵衛
仝　道修町二丁目	福田清右衛門
仝　道修町二丁目	鹽野儀三郎

（明治二十五年九月十四日遞信省認可）

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地株式會社秀英舎印行